

聖徒の道

6
1992



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1992年6月号



表紙——「神殿に参入して主の宮居にかかわる儀式を受けると、……確かな祝福が与えられます。」エズラ・タフト・ベンソン大管長はそう語っている。(本誌「神殿に参入しなさい」p. 1 参照)表紙の写真はソルトレーク神殿。撮影はエルドン・リンショーテン。裏表紙を飾るソルトレーク神殿の写真は、ロイス・ベアの撮影による。

子供のページ表紙——ソルトレーク神殿とテンプルスクウェア内にあるそのほかの建物。左上に見えるドーム状の屋根を持った建物がタバナクルです。右上の建物はほう問者センター北館。この中には、福音の計画を説明した展示があります。絵シャウナ・ムーニー・カワサキ。

一般

神殿に参入しなさい 大管長エズラ・タフト・ベンソン……………	1
大管長会メッセージ——なぜ神殿を	
第一副管長ゴードン・B・ヒンクレー……………	2
エンダウメント——その誓約と祝福……………	9
聖き宮居 ボイド・K・パッカー長老……………	14
癒しのみ手 アイリーン・スター……………	24
死者の救い……………	25
はらかな地の、はるか昔の友 ペギー・ヒル・リスカンプ……………	32
末日の神殿……………	34
ある日、神殿で マリー・ノーエル・リグビー……………	44
嵐を静める マービン・K・ガードナー……………	46

定期特別記事

家庭訪問メッセージ——心を開いて若い女性を歓迎する……………	48
--------------------------------	----

こども

神でん——神せいな所

エズラ・タフト・ベンソン大かん長……………	2
モルモン経物語——せん教しになったモーサヤのむすこたち……………	4
歌 神殿がすきです ジャニス・カップ・ベリ……………	5
分かち合いの時間 ジョセフ・スミスけいじをうける	
バージニア・ピアス……………	6
こわれた電灯 アルマ・J・イエーツ……………	8
おもちゃばこ……………	13
たんけん モロナイのぞうができるまで	
シャノン・W・アスラー……………	14

聖徒の道

1992年6月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オクス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、チャールズ・テイディエ、ロバート・E・ウエルズ

編集長：レックス・D・ピネガー
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ディエーン・ウォーカー

チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ
アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック
制作：レジナルド・J・クリステンセン、ステューブ・テイトン、ジェーン・アン・ケンプ、テニース・カービー

工程管理：ダイアナ・パンスタブレ
配送部長：ジョイス・ハンセン
聖徒の道 1992年6月号第36巻第6号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106 東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351
印刷所 株式会社 精興社/クロスロード
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
普通号150円、大会号350円

International Magazine June 1992
ITEM 92986 300
Printed in Tokyo, Japan.
Copyright © 1992 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Translated into Japanese 1992.

●定期購読は、「聖徒の道」申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to *Seito No Michi* at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

神殿に参入しなさい

大管長

エズラ・タフト・ベンソン

御父の宮居は「秩序の家」(教義と聖約88:119)です。私たちはこの秩序ある神権の位(教義と聖約131:2参照)に入るために神の宮居に参入しますが、忠実であれば、それによって御父の持てるすべてが与えられます。(教義と聖約84:38参照)なぜなら、主が近代の啓示の中で示されたように、アブラハムの子孫は神権の「正当なる世つぎ」だからです。(教義と聖約86:8-11、84:33-34参照)

神殿に参入して主の宮居にかかわる儀式を受けると、次のような確かな祝福が与えられます。

- エライジャのみたまを受け、それによって自分の伴侶、子供たち、先祖に心が向くようになります。
- 以前にも増して、家族への愛が深まります。
- 心が先祖に向き、先祖の心も私たちに向きます。
- 主が約束されたように、「いと高きところより」力を授かります。(教義と聖約105:11参照)
- 「神の知識の鍵」を授かり、どうすれば御父に似た者となれるかを理解するようになります。また「神の能力」が示されます。(教義と聖約84:19-20参照)
- 幕のかなたへ去った人々のために大いなる働きができます。この働きのために、彼らは「肉においては人間として裁きを受けるが、霊においては神に従って生きるようになる」(死者の贖いに関する示現1:34)ことができます。

これらは神殿が与えてくれる祝福であり、頻繁に参入するときに得られる祝福です。

神の祝福があり、神殿に参入するときにどれほど大きな祝福が得られるかを自分の子供や孫たちに教えられるよう願っています。また、神殿に参入して私たちに備えられているすべての祝福を享受し、召しと選びとを確かなものとするために(IIペテロ1:10参照)、予言者エライジャによってもたらされた祝福をすべて得られるように願っています。

これらの教えが真実であることを私は心から証します。どうか、アブラハム、イサク、ヤコブの神が、天父の宮居で得られる先祖のすべての祝福を得たいという強い願いを、現代のイスラエルの心に満たしてくださるようにお祈りいたします。□



なぜ神殿を

第一副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

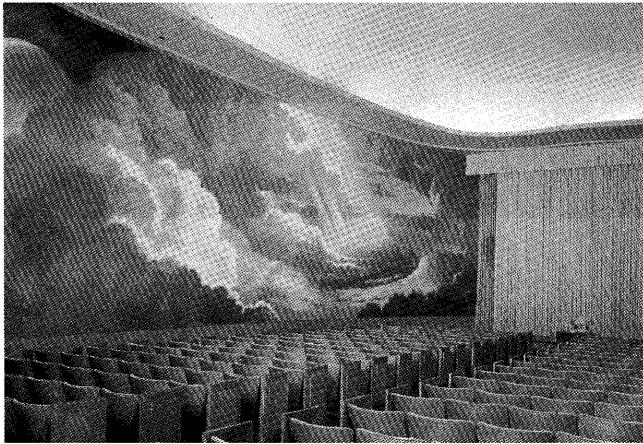
人生についての疑問に不変の答えを与えてくれる場所は、この世にわずかしかなかった。

静

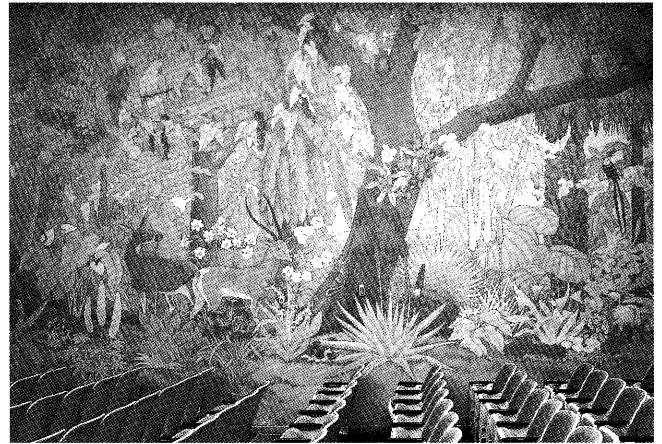
かに自分自身を見つめ直すとき、私たちは人生の厳粛な神秘に思いを
はせずにはられません。

皆こう自問するのです。「私はどこから来たのだろうか。なぜここにいるのだろうか。これからどこに行こうとしているのだろうか。私を創造された方と私はどのようなつながりがあるのだろうか。死によって大切な人々のつながりも絶えてしまうのだろうか。妻と子供たちはどうなるのだろうか。この世の生涯を終えた後も、別の世があるのだろうか。もしそうだとしたら、そこでまた親しい人々と会えるのだろうか。」

これらの質問に対する答えは、人の知恵で得られるものではありません。啓示された神のみ言葉の中でしか得られないのです。末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿は、これらの疑問をはじめとする、永遠にかかわる疑問に答えを与えてくれる神聖な建物です。どの神殿も主の宮居^{みやい}として、この世の事柄から隔たった、神聖で平安な場所として奉獻されています。そこでは真理が教えられ、永遠の事柄についての知識を与える儀式が執行されます。神殿に参入する人々は、これらの儀式を通して、神の子供としての神聖な受け継ぎを理解し、永遠の存在として内に秘めた可能性を認識します。そしてそれを常に心に留めて生きていこうと決心するのです。



創造の部屋(カリフォルニア州、ロサンゼルス神殿)



園の部屋(アイダホ州、アイダホフォールズ神殿)

これらの建物は、世界中に建てられている教会の一般の礼拝堂とは違い、目的と機能においてどんな宗教的建造物とも異なった特徴があります。独特なのは、建物の大きさでも美しさでもありません。建物の中で行なわれているみ業なのです。

一般の礼拝堂とは区別して、特定の建物を特定の儀式のために設けることは、目新しいことではありません。それは古代イスラエルでも行なわれていました。イスラエルの民はいつもは会堂で礼拝していましたが、さらに神聖な場所として、至聖所を備えた幕屋を最初に荒野で造り、次いでいくつかの神殿を建てました。その中では特別な儀式が行なわれ、特定の資格を備えた者だけがその儀式に参加できました。

それは現在も同じです。末日聖徒イエス・キリスト教会では、神殿を奉獻する前に一般公開し、内部を見学する機会を提供しています。しかし神殿は、いったん奉獻されると主の家となり、非常に神聖なためにふさわしい教会員しか入ることのできない場所となります。それは、秘密にしておくためではなく、極めて神聖だからなのです。

神の家族

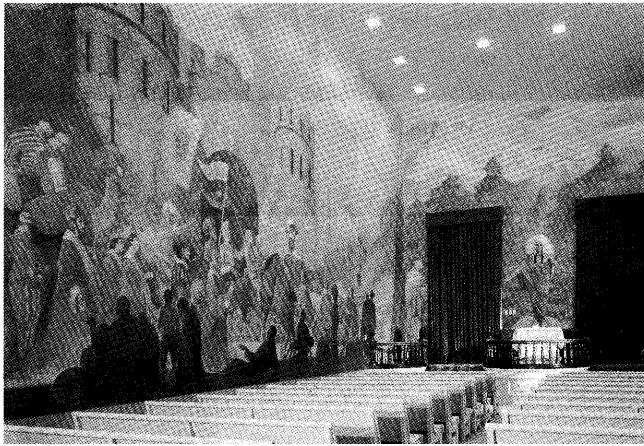
私たちはこの建物の中で行なわれる儀式を通して、神の子供であり被造物である人間に対する神の永遠のみこ

ころを知ることができます。そのほとんどは、私たちが属する神の永遠の家族と地上の家族に関することであり、結婚の誓約と家族関係の神聖さや永続性に関することです。

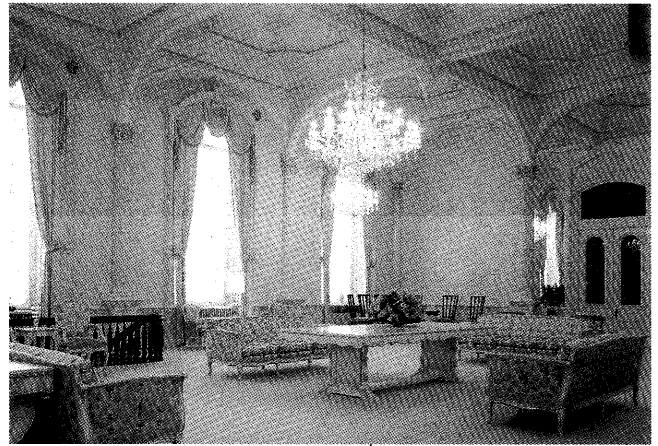
神殿の儀式により、地上に生を受けるあらゆる人間が神の子供であり、神が有しておられる特質の幾分かを授けられているともはっきり教えられます。このような基礎的、根本的な教えを繰り返すことで、儀式を受ける者は有益な影響を受けます。参入者は、美しく心に残る言葉で語られる教えを耳にし、全人類は天父の子供であり、天父の家族に属する兄弟姉妹であることを理解するのです。

律法学者が「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」と尋ねたときに、救い主はこう答えられました。「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ。』第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』」(マルコ12:28, 30-31)

近代の神殿の中で示される教えは、この一番根本的な人の義務、すなわち創造主と同胞とに対する義務に重点が置かれています。そして数々の神聖な儀式は、神の家族というこの高邁な思想を詳しく説明したもののなのです。また死すべき体とは対照的に、私たちの内なる霊が永遠であることも教えられます。さらに、これらの儀式によ



現世の部屋(ユタ州, マンタイ神殿)



日の光栄の部屋(ユタ州, マンタイ神殿)

って大いなる真理を理解できるだけでなく、神を愛し、天父の子供たちになお一層隣人愛を示そうという思いに満たされるのです。

人は神の子供であるという前提に立つと、人生には神聖な目的があることを理解できるようになります。主の宮居では、そのことについても啓示された真理が教えられています。この世での生活は、永遠の旅の一過程です。私たちは地上に来る前に神の霊の子供として生活していました。聖典はそれを証しています。エレミヤに対する主のみ言葉を見てみましょう。「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした。」(エレミヤ1:5)

私たちはこの世の両親の子供として、また家族の一員として生を受けます。両親は、神の子供たちに関する天父の永遠のみこころを成就するため、神と協力して働きます。だからこそ家族は、この世にあっても永遠にあっても最も重要かつ神聖な制度なのです。

家族を永遠のものとする

神殿で行なわれることの大半は、家族に関係しています。私たちはこの世に生まれる以前に神の子供として存在していました。ちょうどそれと同じように、私たちは

死後も生き続けます。私たちにはこの世で大切にしている満ち足りた人間関係がありますが、その中でも最も意義深く美しいものは家族の中に存在します。このきずなは次の世でも断ち切られることはありません。このような事実を認識することは、神殿の儀式の目的を理解する根本となります。

主の宮居に来て祝福にあずかる夫婦は、この世だけでなく永遠に結ばれます。国の法律によって死がふたりを分かちまで結ばれるばかりか、地上で結ばれたものが、神の永遠の神権を通して天でも共に結ばれるのです。こうして結婚した夫婦は、その祝福を受けるにふさわしい生活をするならば、自分たちの関係や子供たちとの関係が死によって終わらず、永遠に続くという確信を神から与えられます。

女性を心から愛した男性、あるいは男性を心から愛した女性で、ふたりの愛が死後も続くことを願わない人がいるでしょうか。子供を亡くした両親で、次の世で再び我が子を腕に抱く日を願わない人がいるでしょうか。人間の最も貴重な属性は愛であり、それは家族関係の中に最もよく表われます。永遠の生命を信じていながら、天におられる神が息子、娘に対して、この愛を示してくだらないのではと思う人がいるでしょうか。そのような人はいないはずで、私たちの理性が家族のきずなは死後も続くことを悟らせてくれるからです。人の魂がそう



PHOTOGRAPH BY BRENT PETERSEN

左——宣教師は、神殿に参入するために自らを備えるよう世界中の人々に説き勧めている。

右——ソルトレーク神殿の結び固めの部屋。このステンドグラスには、復活したモロナイが予言者ジョセフ・スミスにモルモン經の金版を授けている場面が描かれている。

願っているからです。そして神はその実現の方法を啓示してくださいました。主の家での神聖な儀式こそがそれなのです。

万人に備えられた機会

しかし、もしこれらの儀式の祝福が、現在末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となっている人だけに限られるとしたら、どれもみな不条理なことに思われるでしょう。しかし実際は、神殿に来て恵みにあずかる機会、これから先福音を受け入れ、バプテスマを受けて教会に入るすべての人に開かれています。そのため、教会は世界中に大規模な伝道計画を推進し、可能な限りこの計画を広げようと努めています。神よりの啓示の下、「あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、あらゆる世の人々」(教義と聖約77:8)に福音を伝えることは、教会の責任だからです。

しかし、かつて地上に生を受けながら福音を聞く機会がなかった人々が無数にいます。彼らは、主の神殿で得られる祝福を受けられないのでしょうか。

この世を去った人々は、代理を務める生者を通して、まったく同じ儀式を受けることができます。死者のために地上で行なわれるバプテスマ、結婚、家族の結び固めなどの儀式を、受け入れるのも拒むのも、霊界にいる当

人たちの自由です。主のみ業に強制はなく、あるのは機会なのです。

この代理の仕事は、死者に対する生者のたぐいえない愛の仕事です。そのためには、すでに世を去った人々を見いだし、その身元を明らかにする大がかりな家族歴史の探求が必要です。その探求を援助するために、教会は家族歴史プログラムを作り、世界に類を見ない探求のための設備を整えています。家族歴史の記録保管庫は一般公開され、教会員ではない人々の先祖探求にも役立つようになりました。このプログラムは全世界の系図学者から称賛を受け、歴史記録を保護する手段として各国で利用されています。しかしその本来の目的は、先祖の身元を明らかにする資料を教会員に提供して、自分たちが享受している祝福を、亡くなった先祖にもたらしことにあります。教会員はこのように考えています。「自分が妻子を愛して永遠に一緒にいたいと思うなら、亡くなった祖父や曾祖父、そしてほかの先祖たちも、同じ永遠の祝福を受けられる機会があってもよいのではないかと」。

聖なる宮居、約束の場所

このようにこれらの神聖な建物は、膨大な働きの場であり、同時にそれは静かに敬虔に推進されています。それは黙示者ヨハネの記録した質問と返答のあの示現を思



い出させてくれます。「『この白い衣を身にまとっている人々は、だれか。また、どこからきたのか。』……『彼らは大きな患難かんなんをとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。』」（黙示7：13-15）

この聖なる宮居に来る人々は、中に入ると白い衣を身にまといまいます。彼らは皆、地元の教会指導者からふさわしさを認められ、推薦を受けてやって来ます。彼らは清い心と清い体を持ち、清い衣を着けて神の神殿に入るよう求められるのです。中に入るときは、俗事を後にして、神につける事柄に集中しなくてはなりません。

この礼拝（もしもそのように呼べるとしたら）には報いが伴います。この緊迫した時代に、世を離れて主の宮居に入り、そこで静かに神にかかわる永遠の事柄に思いをはせたいと思わない人がいるでしょうか。この神聖な場所では、ほかのどこからも得られない機会が与えられます。そこでは、人生で本当に大切な事柄、すなわち神と私たちとの関係や、前世からこの世に続き、さらに再び人々と会える将来へと続く私たちの永遠の旅について知り、思いを巡らすことができます。私たちは愛する人々や、自分に肉体や精神、霊という受け継ぎをもたらせてくれた遠い先祖たちとも再び会うことができるのです。

確かに神殿は、あらゆる建物の中にあって異彩を放っています。それは神殿が教えの家であり、誓約と約束の場所だからです。私たちは聖壇で創り主なる神のみ前にひざまずき、永遠の祝福を約束されます。その神聖な約束を受けながら、贖あがない主、救い主なる御子イエス・キリストを思い、主と交わるのです。主は私たち一人一人のために身代わりの犠牲となってくださいました。死者は、

自分自身のために働くことができません。私たちは神殿で彼らのために、利己心を捨てて奉仕するのです。こうして、私たちは神の真の神権の力を通して、最も神聖な人間関係で結ばれます。夫と妻、親と子、家族として時も死も越えたきずなによって結ばれるのです。

この神聖な建物は、末日聖徒が迫害によって容赦なく住む場所を転々と追われたあの暗黒の時代にも、建てられました。窮乏の時代にも繁栄の時代にも建造され、守られてきました。これらの神殿は、大勢の人々の力強い信仰の所産です。彼らは、生ける神と復活された主、そして予言者と神よりの啓示に対して証を持ち、主の宮居でのみ得られる永遠の祝福からもたらされる平安と確信への証を持った人々なのです。□

ホームティーチャーへの提案

1. 神殿では、ほかのどこからも得られない機会が与えられます。そこでは、人生で本当に大切な事柄、すなわち神と私たちとの関係や、前世からこの世に続き、さらに将来へと続いている私たちの永遠の旅について知り、思いを巡らすことができます。

2. 神殿で結婚した夫婦は、その祝福を受けるにふさわしい生活をするならば、夫婦の関係や子供たちとの関係が死によって終わらず、永遠に続くという確信を神から与えられます。

3. この世を去った人々は、代理を務める生者を通じて、神殿の儀式を受けることができます。死者のために地上で執行される儀式を受けるのも拒むのも、霊界にいる当人たちの自由です。

エンダウメント

その誓約と祝福



主は予言者ジョセフ・スミスを通じて、神殿での誓約と祝福を伴う神聖な儀式を、地上に再び回復されました。後に大管長会の一員となったジョージ・Q・キャノン長老は、神殿の祝福を人類が再び受けられるようになった1840年代に、教会員が抱いた強い関心をこう書き残しています。

「予言者ジョセフ・スミスから、『主は私にエンダウメントの鍵^{かぎ}を啓示された』と初めて知らされたとき、皆がそれについて知りたいと熱望したことを覚えている。予言者は、神に告げられたことを神の僕である同胞^{しよまへ}に伝えるため、神殿を建設したいという願いを語った。そのとき会衆は沸き立ち、ひとつの願いで人々の胸は満たされた。」
（「福音の真理」1：228）

神殿でのエンダウメントの意味と本質について考えてみましょう。末日聖徒は神殿の儀式の詳細を神殿の外では話しません。では、関心を持つ教会員や友人に対して、神殿について適切な説明をするにはどうしたらよいでしょうか。

幸いなことに、教会の歴代の大管長や十二使徒定員会会員がその概要をわかりやすく語っています。

神殿では天父の子供たちに対する
主の計画の概要が明らかにされ、
前世、現世、来世での生活について
学ぶことができる。
上——ソルトレーク神殿の創造の部屋

十二使徒定員会会員であり、著名な学者でもあったジェームズ・E・タルメージ

「近代の神殿で執行されるエンダウメントは、過去の各神権時代の意味とその歴史、また人類の歴史上最も大いなる時代であるこの現代の大切さに関する教えから成っている。この一連の教えには、創世の時代の最も顕著な出来事についての話、エデンの園における私たちの最初の両親の状態、不従順とその結果として生じた喜びに満ちた生活からの追放、額に汗して働いて生活するよう宣告されたときの孤独で荒涼とした世界でのふたりの状態、この大きな咎^{とが}が贖^{あがな}われるという救いの計画、大背教の時代、古代に存在していたすべての権威と特権を備えた福音の回復、現世における個人の清さと義への献身という必要欠くべからざる条件、福音が要求することに完全に従順であること、などについての話が含まれている。……

エンダウメントの儀式を受ける人は、次のような義務をその身に引き受けるのである。すなわち、貞操と純潔の律法を厳格に守り、慈愛、仁愛、寛容、清さの諸徳を持ち、真理を広め人々に



高揚するために自分の持てる才能と財産を捧げ、真理のために献身し、この地上が地上の王である主イエス・キリストを迎えるために、あらゆる方面から大いなる備えをする努力を惜しまないという義務である。すべての誓約を交わし、すべての義務を負うとき、どのような事柄にも誠実に従うという条件で、祝福の約束が宣言される。

神殿の儀式のあらゆる部分は、人の心を高揚し、清めてくれる。つまり、道徳的な生活を送るという誓約、高い理想への精進、真理への献身、国家への愛、神への忠誠などの事柄に対し、エンダウメントの儀式全体が助けとな

ソルトレーク神殿
上——園の部屋
下——エデンの園を追い出される
アダムとイヴを描いた
ステンドグラスの窓
右——現世の部屋

るのである。主の宮居の祝福は特別な人々のみに制限されているわけではない。教会の会員ならだれでも、もし生活と行ないにそのふさわしさを認められたならば、神殿に入る許可を得て、儀式に参加する権利を得られるのである。」(「主の宮居」pp. 74-75)

十二使徒定員会会員であり、大学学長、また科学者でもあったジョン・A・ウィットソー

「神殿で教会員に与えられるエンダウメントは、いくつかには区分される。第1に、時の初めから榮えある行く末に至るまでの人の永遠の旅路についての教えが与えられる。次に、その終わ



りのない旅が天に向かうようにするにはどうすればよいか、数々の条件が告げられる。この教えを受ける人は永遠の進歩の律法に従うことを誓約する。そうすることにより、受けた知識を生活に取り入れるのである。最後に、人はいつか自分の行ないを報告し、神を知っていたことと、教会の業に携わったことを証明しなければならないことが明らかにされている。エンダウメントは、非常に美しく、論理的で、靈感に満ちた儀式である。」(「合理的神学」pp. 125-126)

教会の第2代大管長であるブリガム・ヤング

「あなたにとってエンダウメントとは、主の宮居において必要なすべての儀式を受けることであり、あなたがこの世を去ったのち、番人として立っている天使たちの前を通り過ぎ、彼らに聖なる神権に結びついている鍵の言葉とするしとかたちを示して御父のみもとに帰り、地や地獄を越えて永遠の昇栄を得られるようにするものである。」(「ブリガム・ヤング説教集」p. 416)

第10代大管長ジョセフ・フィールディング・スミス

「神殿において私たちは、主に仕え、



ソルトレーク神殿
上——月の光栄の部屋
右——日の光栄の部屋

主の戒めを守り、自らを世の汚れに染めずに身を清く保つと手を挙げて誓約する。その場で自分が行なっていることを正しく認識するならば、エンダウメントは私たちの生涯を通じて守りとなるであろう。それは、神殿に参入していない人には得られない守りである。

私は父が、試しや誘惑に遭うとき、主の宮居で受けた約束と、交わした誓約のことを考えると言ったのを聞いたことがある。そして父は守られた。……これらの儀式はこの守りを与えるためにもある。これらの儀式を敬い尊ぶならば、私たちはこの世において救いを得、次の世においては昇栄を受けるであろう。私はこの守りが与えられることを知っている。自らの義務を覚える大勢の人々と同様、私もそれを実感しているからである。」(「ユタ系図歴史機関誌」p. 103)

エンダウ(賦与する)とは、人を豊かにすること、いつまでも損なわれることのない高価なものを与えることです。末日聖徒にとってエンダウメントの祝福は、人生にとって高価な真珠のようなものであり、絶えることのない力と限りない靈感や励ましを与えてくれるものなのです。□



聖き宮居

十二使徒定員会会員
ボイド・K・パッカー

人が神殿へ行きたがる理由は様々です。その外観を見ただけでも、神殿には深遠なる霊的な目的があることがわかりますが、その壁の内側においてはなおのことです。扉の内側へ一歩足を踏み入れれば、そこが「主に捧げられた聖き場所」であることを否めるものではありません。献堂された神殿に入るということは、主の家へ入るとのことなのです。

自らをふさわしく整えた教会員は、神殿において、人類に啓示された最も貴い贖いの儀式を受けることができます。この神聖な式典において、私たちは、洗いの儀式、灌油の儀式を受け、様々な事柄を教えられ、エンダウメントを受け、そして結び固めの儀式を受けるのです。こうして自分自身の祝福を受けた後は、このような祝福を受けることなく世を去った人々のために、儀式を行なうことができます。神殿の中では、この地上の人々と同様、すでに世を去った人々にもこの神聖な儀式が行なわれます。

主の家は、イエス・キリストの福音の力と
靈感の象徴となっている。
右——冬のロンドン神殿





PHOTOGRAPH BY MARK HENDERSON



死者のための

神聖なバプテスマの儀式は、

主の宮居で行なわれる。

左——カナダ、アルバータ神殿の

バプテスマの部屋。

神聖な事柄

聖典を注意深く読むならば、主は必ずしもすべての人にすべての事柄を示しておられるのではないことがわかります。聖い事柄について知るには、それなりに必要欠くべからざる資格を備えていなければなりません。神殿の儀式は、そのような資格を持つ人々の間でのみ執り行なわれる儀式なのです。

私たちは神殿の儀式について、神殿外では話しません。そう言いますと、神殿の儀式に関する事柄はその恩恵に浴するに足る選ばれた少数の人々のみが学び得るものであって、そのほかの人々は決して学ぶことができないと思われがちですが、実際はまったくその逆です。私たちはだれもが神殿へ行く資格を持ち、神殿に入る準備をするようにと、多大な努力を傾けているのです。神殿に参入した人は、物事のひとつの理想の姿を学んでいます。いつの日か、生ける者も死せる者も福音を聞き、神殿で行なわれていることを受け入れるか拒むかの機会を得ます。もしこの機会を失う人がいるとするならば、それはその人自らが拒むからです。

神殿で行なわれる儀式は、単純明快なものです。また、美しく、神聖なものです。そして、準備のできていない人々に施すことがないように隠されています。神殿に参入するための準備とは、好奇心を持つことでもなければ、深い興味を抱くことでもありません。そのようなことではなく、信仰を持ち、悔い改め、バプテスマを受け、確認を受け、ふさわしい生活をし、主の宮居に招かれる客にふさわしく成熟し、尊厳を備えるという基本的なステップを踏むことなのです。

あらゆる面でふさわしく、また資格を持った人であればだれでも神殿に入ることができ、神聖な儀式を受けることができます。

ふさわしさとは

私たちはひとたび神殿の祝福の価値や神殿で執り行なわれる儀式の神聖さを肌で感じると、聖なる神殿に入るために主がなぜ高い標準を定めたもうたかということについて疑いを抱くことがなくなります。

神殿に入るためには、有効な推薦状を持っていなければなりません。また、その推薦状には教会の適切な指導者の署名がなければなりません。ふさわしい人のみ、神殿に入ることができるのです。監督または支部長には、その人がふさわしいか否か質問する責任があります。この面接はとても大切です。なぜなら、それは聖任された主の僕と共に皆さんの人生の行程について考える機会だからです。皆さんの人生の行程に何か間違ったことがあれば、監督はそれを正す手助けをしてくれるでしょう。こうして皆さんはイスラエルの共通の判士の助言を受け、自らの信ずるところを話し、主の承認を得て神殿に参入するためにふさわしい状態になれるよう助けを受けることができるのです。

神殿推薦状発行のための面接は、監督と推薦状交付を希望する会員だけで行なわれます。この面接の折に、会員は自らの品行やふさわしさ、そして教会と教会の役員に対する忠実さを問われます。その人は、道徳的に清いこと、知恵の言葉を守っていること、完全に什分の一を納めていること、教会の教えに従って生活していること、教会の教えに反するもろもろのグループと親しい関係を持ったり、同情的な態度をとったりしていないことを証言しなければなりません。監督は面接で話し合った問題については口外してはなりません。これは最も大切なことです。

監督の質問に対して然るべき返答をした人は、普通の場合、神殿推薦状を受けるにふさわしい人です。もし推

ふさわしい教会員は
末日の神殿で
この世から永遠にわたって
結び固められる。
右——台湾の台北神殿で
神殿結婚を
終えたばかりの夫婦。

薦状申請者が戒めを守っていなかったり、正さなければならぬ、あるいは解決しなければならない問題を抱えていたりした場合には、その人自らが、真に悔い改めたことを証明した後でなければ、神殿推薦状を発行することはできません。

監督との上記のような面接が終わると、ステーキ部長会の一員とも同様の面接を受け、その後、神殿に行くことができるようになります。

天よりのみ教え

初めて神殿に参入する場合はもちろんですが、もうすでに何度も参入している人も、神殿で受ける教えが象徴的なものであることを心に留めておくことよと思います。偉大な教師である主は、象徴という方法を用いて、教えを授けてくださるのです。

神殿は、偉大な学校です。学問の家なのです。神殿の中には、霊的に深い事柄を学ぶにふさわしい理想的な雰囲気があります。十二使徒定員会の故ジョン・A・ウィットソー長老は、非常に優れた学長で、世界に名を知られた学者でしたが、神殿の業に深い畏敬の念を持っていました。彼はこう語っています。

「神殿の儀式では、救いの計画全体が教えられている。時代から時代へ、教会の指導者が語り続けた教えが教えられ、理解し難い問題を明らかにしているのである。神殿の教えは、ゆがめたりこじつけたりすることなく、偉大な救いの計画に当てはめることができる。エンダウメントは哲学的見地から見ても首尾一貫しており、神殿の儀式の真実性を示す強力な論拠のひとつとなっている。加えて、神殿の儀式の概要、さらには福音の計画全体を思うとき、神殿に入って礼拝することは、福音の体系全体を心を新たにしてお見渡す非常に良い方法である。」

(「ユタ系図・歴史機関誌」1921年4月号, p. 58)

神殿で教えられることが象徴的なものであることを心に留めて神殿に行くならば、必ずやビジョンは広がり、少しなりとも高められたという気持ちを味わい、霊的な事柄にかかわる知識を増し加えることができるでしょう。神殿の教えは壮麗なものです。また、人の霊を鼓舞するものです。偉大な教師である主は、絶えずたとえを用いて弟子たちを教えられました。少しわかりにくい事柄については、象徴を用いて話されたのです。

神殿自体、ひとつの象徴となっています。夜、全景を照明で照らし出された神殿を見たことのある方はおわかりでしょうが、何という心を打つ光景でしょうか。光を浴びて闇の中にそびえ立つ主の家は、霊の暗闇に深く沈んでいくこの世に立てられたイエス・キリストの福音の力と靈感の象徴となっています。

神殿に入ったら、普通の服を脱いで白い神殿着を着ます。着替えは更衣室ですが、更衣室にはロッカーと着替えのための場所があり、終始だれにも見られることなく着替えをすることができます。神殿では、何事も慎重な状態に保たれるように考慮されています。ロッカーで着替えを済ませたら、それまで着ていた服と一緒に、世の煩いや関心事、娯楽なども脱ぎ捨てることとなります。そして白い装いで更衣室を出ると、あなたと同じように白い服を着た周囲の人々とひとつになったと感ずることでしょう。

結び固めの力

神殿結婚を望んでいる人々は、そこで何が行なわれるかを知りたいと思うでしょう。結び固め(結婚)の儀式の言葉を神殿の外で言うてはいけませんが、部屋の美しさや静かで穏やかな雰囲気、それにそこで行なわれた神聖





結び固めの部屋は
どの神殿でも
「美しい調度が整えられ
静かで穏やかな
雰囲気に入れられ、
そこで行なわれる
神聖な儀式の故に
清められて」いる。
左——東京神殿の
結び固めの部屋。

な儀式に立ち会って心の清められる思いがしたことなどを話すのは構いません。

聖壇にひざまずいて結び固めの儀式を受ける前に、儀式執行者は花嫁花婿に少し話をするすることができます。たとえば、次のような話です。

「きょうはおふたりの結婚の日です。きっと胸がいっぱいでしょう。神殿は、このような儀式を執り行なう聖なる場所として建てられたのです。私たちは、この世にいては世のものには及ばず、世のものはここで執り行なわれる事柄に何の力も及ぼすことができません。私たちは世から離れて、主の宮居にやって来ました。きょうこの日は、おふたりの生涯の中で最も大切な日となることでしょう。

あなた方は、あなた方の霊の宿る肉の幕屋を準備してくださった両親に招かれて、この世に生まれ出て来られました。そして、バプテスマを受けました。聖なる儀式であるバプテスマは、罪の清め、死と復活、そして新たな生命を得ることの象徴なのです。バプテスマには、悔い改めと罪の赦しが伴います。聖餐式のときにはバプテスマのときに交わした誓約を思い起こしますが、その誓約に忠実であれば、罪の汚れから離れた状態を保ち続けることができます。

花婿は、神権者として聖任されています。まずアロン神権を授けられ、多分、執事、教師、祭司のすべての段階を踏んでこられたことと思います。それから、メルキゼデク神権を受けるにふさわしいと認められる日がやって来ました。アロン神権よりも高いメルキゼデク神権は、最も清い神の神権の秩序にのっとった神権、すなわち神の御子の神権の聖なる神権(アルマ13:18; ヒラマン8:18; 教義と聖約107:2-4参照)です。あなたは、この神権の中のひとつの職を与えられ、現在は長老です。

おふたりは、すでにエンダウメントを受けられました。

エンダウメントの儀式の中で、あなた方は永遠の可能性を賦与されました。しかし、これはある意味で、この世から永遠にわたって夫婦となるために聖壇に進み出て、結び固めを受ける準備にすぎません。あなた方は今や家族を成し、自由に生命の創造に携わることができるのです。そして、献身と犠牲を通して子供たちをこの世に迎え、はぐくみ、この世に在る間、安全に生活できるように助け、あなた方おふたりがこの神殿に入られたように、いつの日か子供たちも神殿に入って、神殿の聖なる諸儀式を受ける光景を目にすることでしょう。

あなた方は神殿に入るにふさわしい者とされ、自らの意志によって、この場に足を運ばれました。あなた方は、お互いに結婚の誓約を受け入れるという重大な責任を負っており、この責任を果たすならば、限りない祝福を受けることができますでしょう。」

歴史的な面と教義的な面の双方から神殿の業について理解したければ、結び固めの力とは何かを理解しなければなりません。また、少なくとも、なぜ結び固めを行なう権能を持つ「鍵」がそれほど重大なのか——ただ単に神殿の儀式を行なうためだけでなく、全世界の教会のあらゆる儀式を行なうために、なぜそれほど重大なのかを考えてみなければなりません。

結び固めの権能は、神から人に与えられた霊にかかわる権威を統括する非常に大切な力です。結び固めの権能を持つ人は、この地上における、主の最高の代表者、教会の大管長です。この地位にある人に、主は最も深い信頼を寄せられ、最上の権威をお与えになるのです。

すでに述べてきたように、教会の霊的に深い事柄に関する教え、特に神殿で教えられる教えの多くは、象徴的な言葉です。この「鍵」という言葉にしても、象徴的な言葉です。また、神殿の権威のもろもろの鍵という言葉も、人が地上で神のみ名によりそのみ業を行なうために、



幕のかなたから死すべき人に与えられた力の行使できる範囲を表わしています。「結び固める」「鍵」「神権」という言葉は、互いに密接に関連のある言葉です。

結び固めの権能の鍵とは、永遠の神権の鍵なのです。

「イエスがピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、弟子たちに尋ねて言われた、『人々は人の子をだれと言っているか。』……シモン・ペテロが答えて言った、『あなたこそ、生ける神の子キリストです。』すると、イエスは彼にむかって言われた、『バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう。』」(マタイ16:13-19)

ペテロは、この鍵を持つことになりました。地上でつなぐ、つまり結び固め、解く権能、また同時に天でも結び固め、解く権能、すなわち「結び固めの権能」を持つことになったのです。ごのもろもろの鍵は、大管長、すなわち予言者、聖見者、啓示を受くる者が保持します。この神聖な結び固めの権能が、今この教会にあります。この権威権能の意味を理解している人にとって、この権能ほど神聖なものはありません。また、この権能ほど大切なものとして保持されてきたものはほかにありません。いつの時代においても、地上でこの結び固めの権能を授けられた人は、比較的少数でした。現在では各神殿に結び固めの権能を持つ兄弟たちがいますが、それでもそう多くはいません。そしてこの権能は、予言者、聖見者、啓示を受くる者、末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長からしか受けることができません。

教会には、すべての家族を贖い、昇栄へと導くに必要なすべての儀式を執り行なうための、十分な権威権能がある。また、結び固めの権能の鍵があるので、正しい秩序のうちに地上でつながれたものは、天でもつながれる。左——ドイツ、フライベルク神殿。

結び固めの権能は、生者と死者のために私たちが行なうすべての事柄をつなぐ権能ですが、そのことが以下の文の中ではっきり述べられています。

「完全な福音がこの地上にあった時にはいつも、主は仲介者を立てられ、地上につなぐことを天においても永遠に結び固めることのできる権能を、彼らにお与えになった。(マタイ16:19; 18:18; ヒラマン10:3-10; 教義と聖約132:46-49参照)……

この力によって結び固められないものはすべて、死をもって終わりとなる。バプテスマも、この永遠の力によってなされなければ、人を日の栄の王国に導き入れる承認を与えるものとはならないし、永遠の結婚の誓約も、この権威によって結び固められなければ、夫婦は、日の栄の世界の最高の位に昇栄することはできない。

結び固めの権能があるために、すべての事物は永遠の力と効力を持つ。この権能は、非常に広範囲にわたる権能であり、生者と死者のために行なわれた諸儀式を包含し、地上の子供たちを、すでに世を去ったその先祖らに結び固め、昇栄した人々の間に永遠にわたって続く、永遠の族長の鎖を作るのである。」(ブルース・R・マッコンキー「モルモンの教義」第2版, p. 683)

教会には、すべての家族を贖い、昇栄へと導くに必要なすべての儀式を執り行なうための、十分な権威権能があります。また、結び固めの権能の鍵があるので、正しい秩序のうちに地上でつながれたものは、天でもつながれるのです。この鍵、すなわち地上でつなぐことを天でもつなぐ鍵は、神からの最も素晴らしい贈り物です。この権威によって、私たちはバプテスマを施し、祝福を受け、エンダウメントを執り行ない、結び固めの儀式を行ないません。そして、そのときに主は私たちの執り行なった事柄をよしとされるのです。

予言者ジョセフ・スミスは、たびたび次のような質問

悩み苦しむとき、
また重大な決断に迫られるとき、
教会員は神殿に行くことができる。
神殿は心配事を持って行くのに
とてもよい場所である。
右——メキシコシティ—神殿の
日の栄の部屋。



を受けたと語りました。

『このすべての儀式を受けなければ、救われないのでしょうか。』私はよくこう答えたものだった。『そのとおり、全き救いを得ることはできない』と。イエスはこう言われた。『わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言うておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。』ここに書かれている『家』という言葉は、『王国』という言葉に置き換えることができる。最高の家へ昇栄する人はだれであれ、日の栄の律法、しかもそのすべてに従わなければならない。』（「教会歴史」6：184）

敵対する者

神殿は、教会の霊的な強さの中心です。敵は、教会全体や私たち個人がこの聖なる靈感あふれるみ業に参加するのを妨げようとするでしょう。神殿の業は末日聖徒や教会全体に霊的な力を非常に力強く与えるものであるため、それに対して反対する力も強く働きます。

ローガン神殿の定礎式の時、ジョージ・Q・キャンロン副管長は、このような話をしました。

「神殿建設のための礎石が置かれるとき、そして主が主の神権者に啓示された秩序に従って神殿が完成するときにはいつも、地上でのサタンの力は弱まり、神の力と信仰心は増し加わる。また、我々のために諸天は力強く揺れ動き、我々は永遠の神と神のみ前に住む諸天使の祝福を下したまえと嘆願し呼び求めるのである。」（「ミレニアルスター」1877年11月12日付、p. 743）

悩み苦しむとき、また重大な決断に迫られるとき、教会員は神殿に行くことができます。神殿は、心配事を持って行くのにとてもよい場所です。神殿の中では、霊的な目を持つことができるからです。そして儀式を受けて

いる間中、私たちはこの世から抜け出ることができるのです。

問題を抱えて気が動転していることもあると思います。そのようなときは一時にどっと不平不満が沸き上がってきて、何もはっきり考えることができず、見ることもできないものです。神殿では、心の混乱に舞い上がったほこりも地面に降りて行き、霧やかすみもうそのように晴れて、混乱した心のままでは到底見いだすことのできなかったような道も、善悪の区別もつかなくなった物事も、はっきりと「見る」ことができるのです。

神殿の神聖な儀式に臨むとき、主は私たちを祝福してください。神殿での奉仕の業に注がれる祝福には、限りがありません。主は私たちに、この世的な面でも霊的な面でも関心を向けてくださるでしょう。

神殿に参入しなさい

神殿の業と、それを支える系図探求の仕事ほど、この教会にとって大きな守りとなるものはありません。またいかなる業も、この業ほどに人の霊を磨くことはできず、人に力を与えることもできないのです。加えて、この業ほど高い標準が要求される業もないのです。

神殿の業は私たち個人にとっても、教会員全体にとっても盾となり、守りとなります。

どうぞ神殿に参入してください。そして、祝福を受けてください。神殿の業は、神聖なみ業なのです。□

癒しのみ手^{いや}

アイリーン・スター

1930年代のアメリカ合衆国を襲った大恐慌の間、裕福な家庭で育った妹と私は確かに人々の羨望^{せんぼう}的でした。父は職に就いており、家族を養うのに十分な経済力がありました。我が家の食卓には母が用意した十分な食物がありました。また母は、私たちを買い物に連れて行って、服を買ってくれました。また、定期的に年老いた祖母を訪ねたりもしました。私は不景気とは何なのか、十代になって学校で学ぶまで知りませんでした。

このような豊かさにもかかわらず、妹と私は母に対して不満を抱いていました。大人になってから私たちが繰り返

返し不平をこぼしたのは、母には温かさが欠けている、私たちを理解してくれない、まったく建設的でない批判をする、道徳的なしつけをしてくれない、家庭でお客をもてなすのが下手であるなどといったことでした。どうして母は私たちに無関心で批判的で自己中心的なのだろうと思ったものです。

教会に入った後、私はよその愛にあふれたやさしいお母さんを自分の母として考えることにしました。しかしそれでも、心の痛みは和らぎませんでした。母が亡くなった後も、その痛みは少しも癒^{いよ}されませんでした。母の死が私に与えたのは、「母に愛されたい、認められたいという強い願いは、この世でかなえられなかった」という思いだけでした。

ある日私は、母の身代わりのバプテスマを受けに神殿へ出かけました。ひとりで車を運転しながら母のことで祈っていると、悲しみの涙が込み上げてきて、泣き出しそうになりました。

常に感じていたあの悲しみと心の痛みは、神殿への道すがらずっと続き、バプテスマフォントに下りたときもまだ消えることはありませんでした。しかし、水から上がったとたん、癒しのみ手が私を包んだのです。それは私の苦悩と切ない願いをすべて洗い流してくれました。

そのとき私は、元気で健康になった母を目にしました。そして、私の母はこの地上では障害者であったと、聖霊の力によって知らされました。母は情緒的に障害を持っていたのです。ただその原因は今でも私には知らされていません。しかし今の母はもう障害者ではありませんし、私の心の傷もすっかり癒されました。

救い主とその愛に感謝の思いでいっぱいです。救い主は愛のみ手を、今は健やかとなった母と私に伸べてくださいました。母は地上に生きている間は学ぶことのできなかった事柄を今学んでいるのです。私は母に会って、私たちが地上では味わえなかった愛を分かち合いたいと心から望んでいます。□



死者の救い

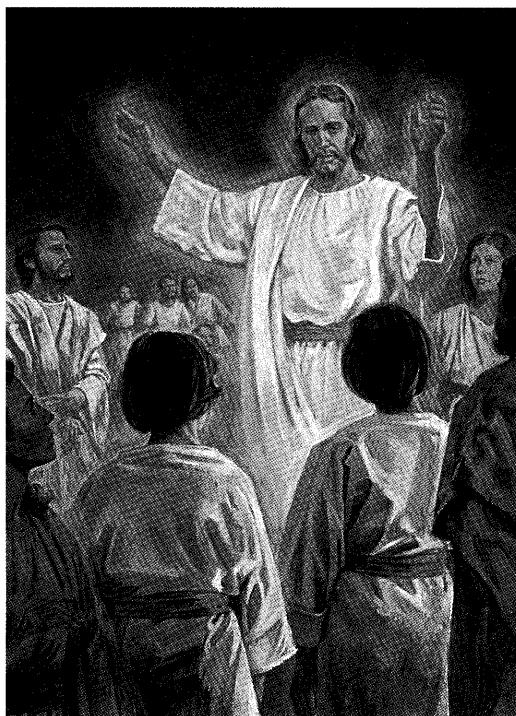
死者のために行なわれる神殿活動は、
新約・旧約両聖書で教えられている真理に基づいています。

使徒ヨハネは「神は愛である」(Iヨハネ4:8)と教えました。

主が啓示された偉大な儀式は、その愛を最も具体的な形で表わしています。これらの儀式は、この世で福音を受け入れる機会に恵まれなかった神の子供たちに救いの祝福をもたらしてくれるのです。

こうした儀式がどれほど大切かということは、家族の関係を考えてみればすぐに理解できます。妻や夫、子供や親族に対する愛よりも強いものがあるでしょうか。

回復されたイエス・キリストの福音がよきおとずれと呼ばれるのは、主の神殿で執行される儀式によって、必要な条件さえ満たせば、こうした家族関係が永遠に続くことが保証されているからです。救いの計画の中でも、最も栄光に満ちた教えのひとつであるこの教えは、現在の神権時代になって初めて伝えられたものではありません。その教えは、旧約聖書や新約聖書で教えられている真理の中にも登場します。



ILLUSTRATED BY ROBERT T. BARRETT

**キリストは、十字架上で亡くなられた後、
霊界を訪れ、そこで「永遠の福音」
を宣べ伝えられた。**

(死者の贖いに関する示現 1 : 19。

1ペテロ 3 : 19参照)

身代わりの儀式

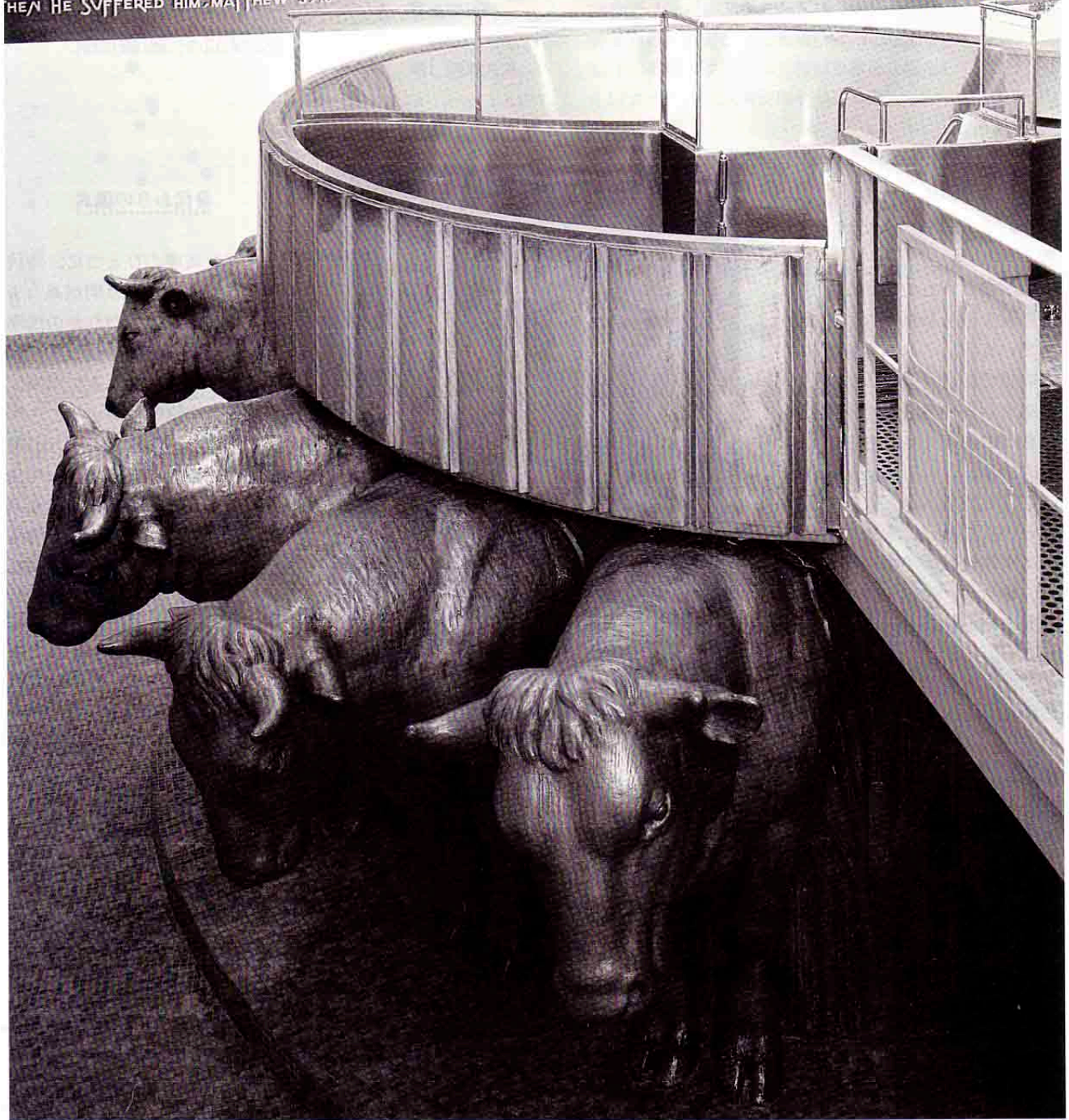
重要な真理のひとつに、身代わりの儀式という原則があります。これは、人がだれかの代理となってその儀式を受けるということです。神は、有史以来、絶えずこの原則を用いてこられました。たとえば、モーセの神権時代には、身代わりのヤギやいけにえの捧げ物が、民の罪の贖いのために、代理として供えられました。こうした捧げ物は、全人類のために捧げられる最も大いなるいけにえ、すなわちイエス・キリストの贖いをあらかじめ表わす象徴として供えられたのです。

イエス・キリストの贖罪は、最も大いなる身代わりの捧げ物です。使徒パウロが書いているように、キリストは、「すべての人のあがないとしてご自身をささげられた」(Iテモテ2:6)のです。それに先立つこと750年から800年ほど前、予言者イザヤは同じように贖い主の犠

牲について予見し、主に関して次のように記しています。「彼はわれわれのとがのために傷つけられ、……その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。」(イザヤ53:5)



SUFFER IT TO BE SO NOW: FOR THUS
IT BECOMETH US TO FULFIL ALL RIGHTEOUSNESS
WHEN HE SUFFERED HIM. MATTHEW 26:15



死者のためのバプテスマ(1コリント15:29参照)をはじめとする神殿での身代わりの儀式を通じて、この世で儀式を受けられなかった人々にも神殿の祝福がもたらされる。左——ニュージーランド神殿のバプテスマフォント。

主イエス・キリストは、罪のないご自身を犠牲にすることによって、主の戒めを守り、その福音の原則に従って生活しようとするすべての人々を贖われたのです。

霊界

主の救いの計画のもうひとつの基本的な教えは、死後、人の霊は霊界へ行くというものです。その霊界では、視覚や聴覚、頭脳は、現世にいたときと同じように機能します。「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。人はみな神に生きるものだからである」(ルカ20:38)とイエスは言われました。イエスご自身も、復活される前に、この霊界を訪ねられました。「よくよくあなたがたに言うておく。死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう」(ヨハネ5:25)とイエスが予言されたとおりです。

霊界へ行かれたキリストのみ業

私たち一人一人のために罪の代価を支払われた主は、死を経験され、霊界へ下っていかれた後、勝利のうちに死からよみがえられました。

み使いが主はすでによみがえられたと女たちに告げた後、同じ日の朝早く、主はマグダラのマリヤにそのみ姿を現わされました。マリヤが復活された主に触れたいと望んだのも無理のないことです。しかし主はマリヤにこう告げられました。「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上^{のぼ}っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行き、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい。」(ヨハネ20:17)

もしまだ天へ上っておられなかったとしたら、体が墓に横たえられていた3日の間、救い主はどこにおられたのでしょうか。使徒の頭であったペテロの書簡の中に、その答えがあります。キリストは、肉体を離れた霊たちのところへ赴いて、そこで彼らのためにみ業を進められたのです。では、主はそこでどのようなみ業を推し進められたのでしょうか。ペテロはこう書いています。「こうして、彼は獄に捕われている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをされた。」(1ペテロ3:19)

この「霊ども」とはどういう人たちだったのでしょうか。ペテロは、「従わなかった者ども」(1ペテロ3:20)のことであると説明しています。「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受ける……ためである。」(1ペテロ4:6)

救い主が死者のために教えと導きを施されるということは、イザヤによって予言されていました。イザヤは、メシヤに代わって書き記すという形式で次のように記録しています。「主なる神の霊がわたしに臨んだ。これは主がわたしに油を注いで、貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、わたしをつかわして心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げ……。」(イザヤ61:1)

この獄にいる者たちに伝えられた福音とは何でしょうか。それは、人々が捕らわれの身から解放されて進歩できるようになり、さらに福音の祝福にあずかれるようになるという教えです。この教えは、主が肉体を離れて霊として過ごされた3日の間に、霊界で確認された教えです。さらに、主によって伝道の職に召された教師たちが、今なお霊界で伝えている教えがこの教えなのです。(ジョセフ・F・スミス—死者の贖いに関する示現参照)

死者のためのバプテスマ

こうして、キリストに関する知識なく死んだ人々にも、贖いのよきおとずれについて聞き、信仰を働かせ、その罪を悔い改める機会が与えられることになりました。しかし、バプテスマについてはどうでしょうか。主がニコデモに教えられたように、人はバプテスマを受けて、つまり水から生まれて初めて、天の国に入ることができるからです。(ヨハネ3:5参照)イエスご自身も、「すべての正しいことを成就する」(マタイ3:15)のためにバプテスマをお受けになりました。そして使徒たちに、福音の教えを受け入れた人々にはバプテスマを施すよう指示し、「信じてバプテスマを受ける者は救われる」(マルコ16:16)と教えられました。

それでは、バプテスマを受ける機会もなく亡くなった人々は、どのようにしてこの儀式を受けることができるのでしょうか。そのような人々は、代理の人を通してその儀式を受けることができます。ちょうどイエスが、私たちのために、私たちの力では及ばないことを身代わりとして行なってくださったように、私たちもすでに亡く

なった人々のためにバプテスマの儀式を受けることができます。そうすることにより、死者にも救いを受け継ぐ者(ヘブル1:4参照)となる機会が与えられます。

使徒パウロがこの儀式のことを話題に取り上げたのは、背信のコリント人たちに復活が現実にあることを教えようとしたときのことでした。パウロから書簡を受け取った人々は、この儀式を、死者のためのバプテスマという名称で、よく知っていました。パウロはこう書いています。「そうでないとなれば、死者のためにバプテスマを受ける人々は、なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとなれば、なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。」(Iコリント15:29)

今日、復活はキリスト教の教えの中でも、おそらく最も栄光に満ちた教義だと考えられています。しかし、そのキリスト教にしても、死者のためのバプテスマという儀式はどこへ行ったのでしょうか。パウロは復活が現実にあることを論証する根拠として、この儀式について触れていたはずですが。初期のキリスト教徒たちが悲劇的な迫害に耐え、また、キリスト教を当時世界の主流であったギリシャ哲学に適応させていこうとする人々によって、その教義が曲げられるのをなすすべもなく見守っているうちに、多くの教えや儀式が失われたり変えられたりしましたが、死者のためのバプテスマもそのひとつでした。

儀式を執行する権能

このような経緯を振り返ってみると、主イエス・キリストが末日に完全な福音をその権能と共に地上に回復されたとき、死者の救いにかかわるもろもろの真理をも回復されたのは当然のことと言えます。(死者のためのバプテスマに関して予言者ジョセフ・スミスが語ったことについては教義と聖約第128章を参照)主は、そうした真理と共に、神権の権威と権能も回復されました。どうしてでしょうか。生者と死者双方のために執行された儀式が、神のみ前に効力を持つものとなり、結び固められるようにするためです。

主は、この世を去るに先立って、使徒の頭であったペテロに神権の権能をお授けになりました。ペテロや彼から権能を授かった人々が、バプテスマをはじめとする救いに不可欠な儀式を執行できるようにするためです。ペテロに向かって主はこのように約束されました。「わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなた

が地上でつなぐことは、天でもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう。」(マタイ16:19)

この同じ神権のかぎが、末日のこの神権時代の開始に当たって、予言者ジョセフ・スミスに回復されました。主は、この結び固めの権能について予言者ジョセフに語られたとき、私たちがこの世を去った後に示される様々な条件について、次のように明確に説明されました。

「一切の誓約、契約、約束、義務、宣誓、誓言、履行、関係、交際または予約にして、為されまたは結ばるるとき、聖任されしものによりて為されず……また『約束の聖きみたま』によりて……結び固められずば、……死にし者より復活する時もその後にも何らの効験効能または効力あることなし。……(われはこれをわが僕ジョセフに任命して末の世に於てこの権能を保有せしむ……)以上の事然るは、以上の目的を以て結ばれざる一切の誓約は人の死を以て終りを告ぐればなり。

見よ、わが家は秩序の家にして……。」(教義と聖約132:7-8)

地上においても天においても様々な儀式を結び固めることのできるこの神権の権能を用いて、主は福音の祝福をすでにこの世を去ったすべての人々にももたらしてくださいました。生者のために行なわれる儀式はみな、死者の身代わりをする人を通して同じように行なうことができます。バプテスマだけではありません。エンダウメントや永遠の結婚の誓約と祝福も、この世でその儀式を受けることができなかつたすべての人々にもたらされることになったのです。

選択の自由

しかしながら、この地上でどのような活動をしようとも、霊界にいる人々の行使する選択の権利を損なうことがないのは当然です。身代わりに行なわれた儀式を受け入れるのも、拒むのも、彼らの自由です。もし、身代わりに行なわれた儀式を受け入れる方を選び、主イエス・キリストを信じる信仰を持って、悔い改めるならば、霊の束縛から解き放たれます。一方、この条件を受け入れることを拒むならば、霊的に束縛された状態にとどまることとなります。選択の権利は、いかなる状態であれ侵害されることはありません。自由意志は、私たち一人一人が父なる神から受け継いでいる永遠の賜であり、私た

教会員は、先祖の名前を探求し、その後神殿で身代わりの儀式を行なうとき、その心を父に向ける。(マラキ4：5-6 参照)



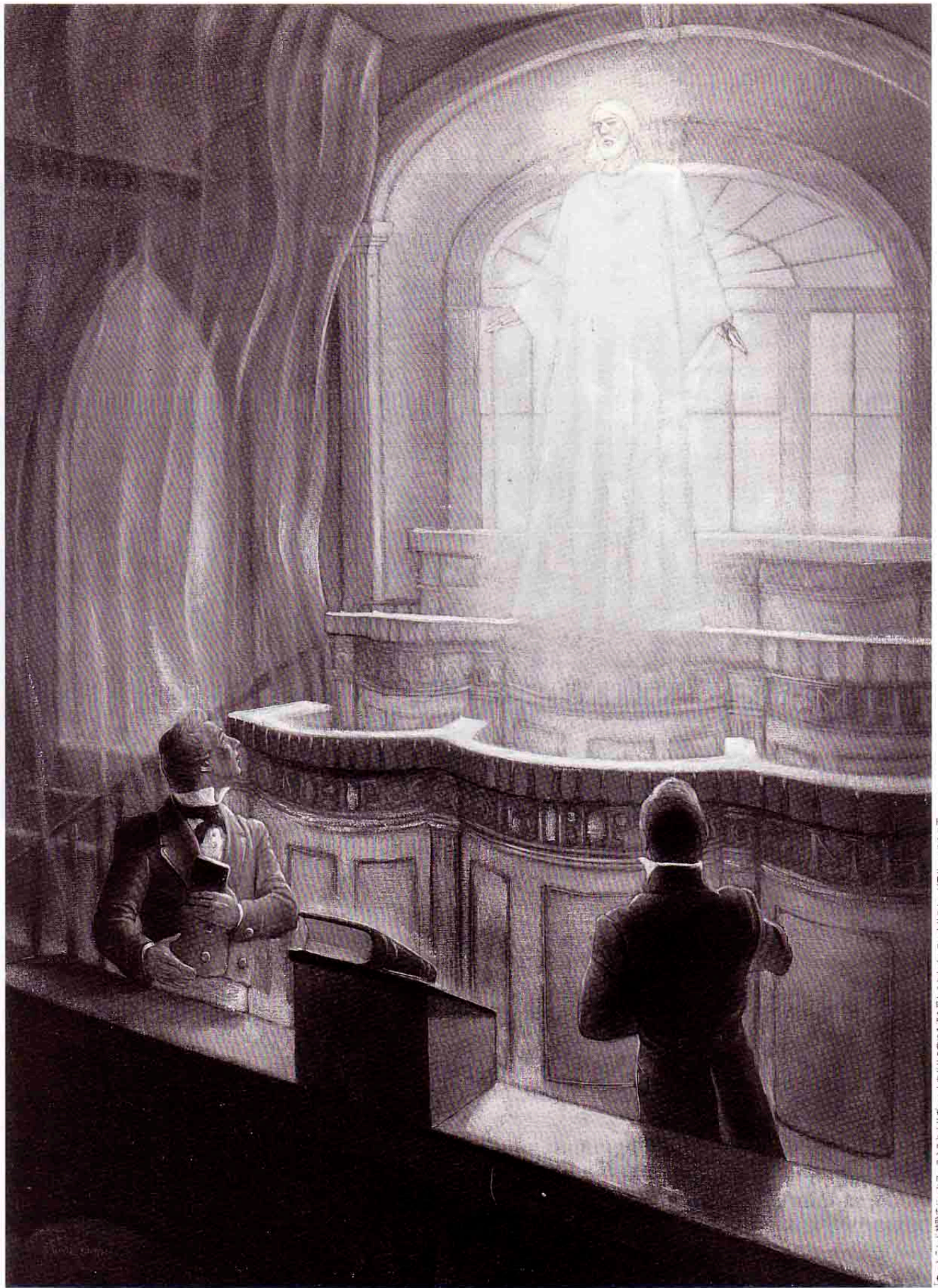
ちが個人として成長していくうえで、欠くことのできな
いものです。主のみ業は、この地上で進められていると
同様に、霊界でも同じように進められています。こうし
て、全人類が、ひとりとして強制されることなく、完全
な福音を受け入れ、かつその教えを活用して生活を高め
るようにと、慈愛に満ちた招きを受けているのです。

エライジャの再来

死者の救いに関するこうした真理は非常に重要であつたため、この神権時代の開始に当たって、予言者ジョセフ・スミスに教えられた最初の原則の中にすでに含まれていました。御父と御子に最初にまみえてからまだ3年しかたっていない1823年9月21日、ジョセフ・スミスは天使モロナイの訪れを受けました。モロナイはこのとき、旧約聖書のマラキの予言が成就する時が近づいた、と教えました。すなわち、「子供たち〔現代の人々〕の心」

が「その父〔私たちの先祖〕」に向けられる時が来た、と言ったのです。(マラキ4：6 参照)こうしてモロナイは、予言者エライジャが主から遣わされて、このみ業を開始するために必要な権能と知識とを受けける、というマラキの予言を4度にわたってジョセフ・スミスに繰り返したのです。

末日聖徒イエス・キリスト教会は、この予言者エライジャが古代においても近代においても予言されているとおり、確かにこの地上を訪れたことを厳かに証するものです。1836年4月3日、予言者エライジャは、オハイオ州カートランドに新しく献堂されたばかりの神殿の中で、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリにその姿を現わしました。そして、死者のためのバプテスマの儀式のみならず、死者の救いのために必要なもろもろの儀式を回復するための権能を、ふたりに授けたのです。エライジャはこう言っています。「この故に、この末日の神権の時代の鍵を汝の手に委す。」(教義と聖約110：16)



カーラント神前でシヨセア・スミスとオリヴァ・カウドロの前にお姿を現わされたイエス・キリスト「ザアリー・スミス画

1836年にエライジャは、カートランド神殿でジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリの前にその姿を現わし、主が約束されたとおりに、結び固めの権能の鍵を回復した。(マラキ4:5-6; 教義と聖約110:13-16参照)

家族歴史と神殿活動

1836年のその日以来、教会は世界中に神殿を建設してきました。その中では、私たちの先祖のために福音の儀式が執り行なわれています。教会はまた、家族歴史の探求が世界中でできるように系図図書館をはじめとする様々な支援設備を整えています。

現在、毎日大勢の末日聖徒が主の神殿に参入し、その父母や祖父母の身代わりとして儀式を受けています。また、記録上、さかのぼれる限りさかのぼって、名前を探し出し、一人一人の身元を明らかにしたうえで、儀式を受けています。こうした人々は、私たちにとっては紛れもなく死者ですが、しかし実際にはまさに霊界で生きている人々であり、主が言われたように、「福音」を待ち望んでいる人々であり、また身代わりの業が行なわれて、「捕われている獄」から解放されるのを待っている人々なのです。こうした身代わりの儀式が行なわれると、死者にとってはこれまで以上に主の戒めが守りやすくなり、成長と進歩をし続けることが容易になります。

死者の贖いの示現

1918年、死者の救いに関する劇的な証が、末日の予言者のひとりに与えられました。ジョセフ・F・スミス大管長の記録したこの示現は、その年の10月3日にスミス大管長がペテロの第一の手紙第3章18節から20節、および第4章6節を読みながら、思いを巡らしていたときに与えられたものです。そこは、使徒ペテロが、主イエス・キリストは十字架上で亡くなった後、霊界を訪ねられた、と論じている場面です。

「これらのことについて深く考えていると、主のみたまが私の上にとどまり、理解の眼が開かれた。そして、死者が、小さき者も大いなる者も共に、群れをなしているのが見えた。

おびただしい数の義人の霊がひとつ所に集まっていた。……

この大群衆が死の鎖から解き放たれる時を喜び、互いに語り合いながら待っていると、神の御子が現われたもうた。そして忠実であった捕らわれ人に自由を宣言し、また永遠の福音、復活の教義、墮落からの人類の贖い、悔い改めを条件とする個人の罪の贖いについて彼らに教えを説かれた。

……そして私は、主が真理を受け入れなかった邪悪な者、不従順な者たちの間へ自ら行って教えられたのではないことを知った。

見よ。主は義人の中から軍勢を組織し、使者を任命して権威と権能とを与え、闇の中にいる者たち、さらにはすべての人の霊のもとに福音の光を携えて行くよう命じられた。……

このようにして、真理の知識がなく罪のあるまま死んだ者、予言者を拒み罪のうちに死んだ者に対して福音が宣べ伝えられた。

これらの者は、神を信じる信仰、罪の悔い改め、罪の赦しを受けるための身代わりのバプテスマ、^{あんしゆ}按手により授かる聖霊の賜について教えを受けた。

またこのほかに、……資格を得る上で知っておかねばならない福音のすべての原則が教えられた。……

私は、この神権時代の忠実な長老たちが、死者の霊が住む広大な世界において闇に包まれ罪のかせにつながれている者たちの間で悔い改めの福音と神の生みたまひし独り子の犠牲を通じてもたらされた贖いの福音を、この世を去った後も引き続き宣べ伝えているのを見た。

悔い改める死者は、神の宮居の儀式を受けることによって贖われるであろう。」死者の贖いに関する示現1:11-12, 18-19, 29-30, 32-34, 57-58)

愛の働き

親や^{ほんりよ}伴侶に対するやさしい情愛の念は、それが霊界にいる伴侶や親、子供に対するものであっても、神の宮居で必ず満たされます。そうした人々の身代わりとなってこの愛ある働きをするということは、この末日において主の道を知り得た人々に共通する義務であり、また祝福でもあります。このように考えてみると、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員が、神殿にかかわる事柄をいつも心に留め、また神聖なものと考えているのも当然のことと言えましょう。□

はるかな地の、 はるか昔の友

ペギー・ヒル・リスカンブ

とうとうここまでやって来ました。系図調査のためのスペイン旅行は、なんと大変なことに思えたでしょう。——周到な計画、何週間にもわたる予算の工面、度重なる祈り、家に残していく子供たちへの後ろ髪を引かれるような思い、処理すべき事柄に至っては枚挙にいとまのないほどでした。

ところが、今私たちはこうしてスペインの教会の小さな1室にいます。夫のジョージは系図の探求にとっても熱心です。結婚、洗礼、死亡などについて1500年代から司祭たちが記録に残した羊皮紙のぶ厚い冊子を、うれしそうに私に見せました。それらは感嘆に値するものでした。ジョージの熱意に支えられて、私も作業がやり遂げられることを願いながら調査を手伝い始めました。

残念なことに、日を経るにつれ、ジョージには簡単にできる作業が、私には大変な労力を要することがはっきりしてきました。夫は周囲のことをすっかり忘れて何時間も探求に没頭できるのです。それなのに私は、いろいろなことが気になって仕方がありません。木のいすに2時間も座っているのは耐えられないほどです。照明に影ができてページが読みづらく、寒くて絶えず震えていたので背中がたまらなく痛くなりました。

私は自分の態度が恥ずかしく、情けない気持ちになりました。ジョージは系図の調査にはいつも特別な興味を示しました。私は自分も同じような熱意が持てるように祈りましたが、気の重くなるような寒い時間だけが果てしなく続くように思われました。

ようやく別の家系に移ることにになりました。この家系の調査は始めたばかりだったので、ジョージが結婚に関する記録を調べる間、私は洗礼と誕生について調べることになりました。そうするうちに、ある家族の記録が私の興味を引きました。その家族の子供一人一人の誕生記録

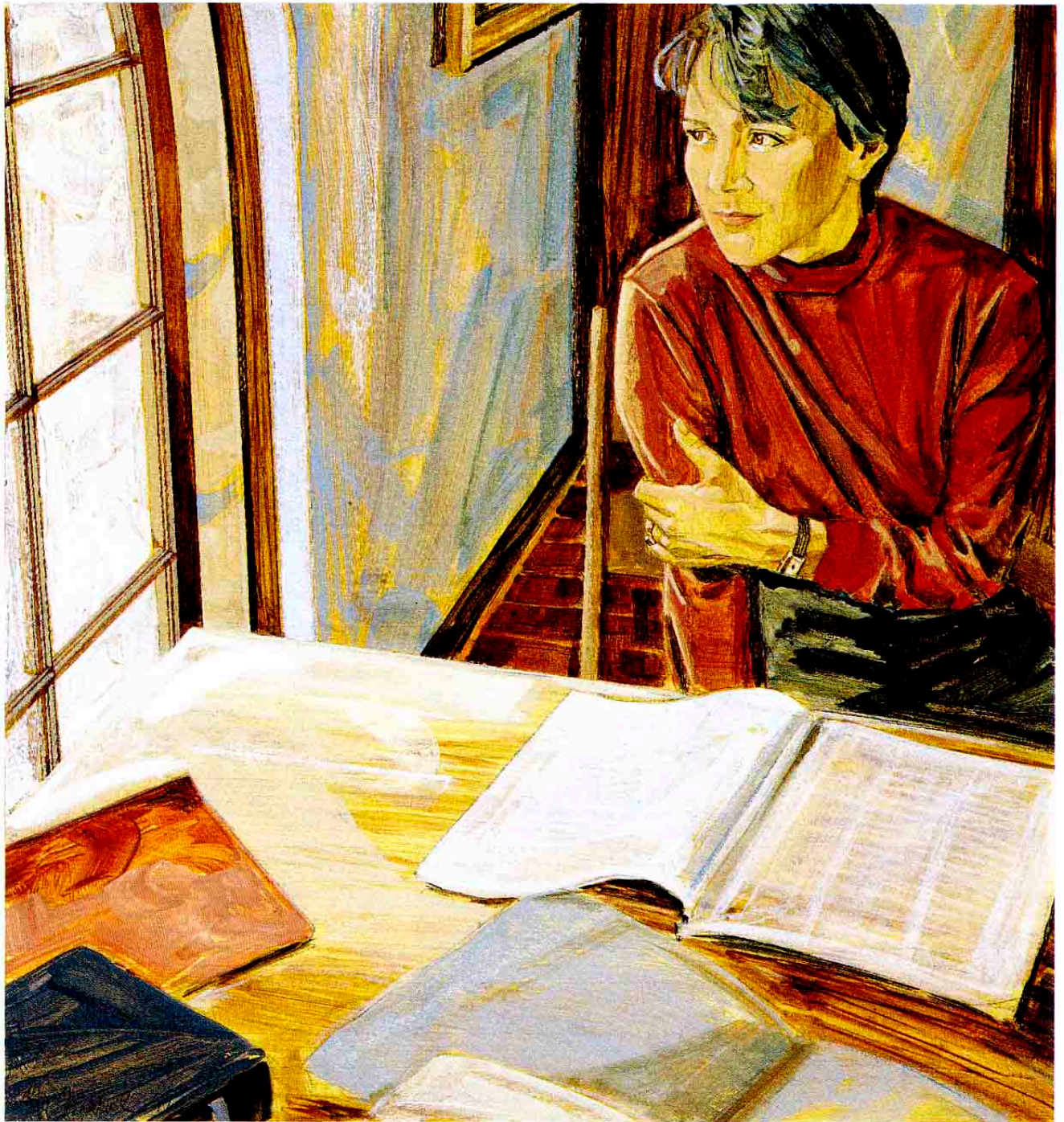
を調べているうちに、その母親を知っているような気がしてきたのです。子供たちの年齢の間隔も、私の子供たちとほとんど同じでした。私は自分の妊娠当時のことや、新しい赤ちゃんが誕生するたびにほかの子供たちが見せた反応などを思い出しました。すでに家を離れて2週間が過ぎていたので、子供たちのにぎやかな声、よだれだらけのキス、元気な抱擁を懐かしく思い出しました。

そのとき、しばらく死亡記録の方を見たらどうかとジョージが言いました。調べていたのは自分と同時代の人々の記録だったので、私が見つけた名前はないもののあるものでした。自分とつながりの深い何人かの年配の人々の死亡記録も目に留まりました。でも、こんなに年若くして大勢の人々が亡くなっているとは、予想もしませんでした。特に親しかった女性の子供の名前を見つけたときには、かわいそうで涙が浮かんできました。その子は3歳で死亡していたのです。ページをめくると、8日後には彼女の6歳の子供の死亡記録がありました。胸が痛んで、涙がとめどなく込み上げてきました。

私は同い年の自分の子供たちのことをまた考えました。ひざの上に抱えたあの子たちの小さな体の感触や家の中に満ちる笑い声などを思うと、同情の念に堪えず、私は泣きながらページをめくっていきました。

ふたりの子供を亡くして半年後に、彼女の夫も世を去ったことを知ったときには、あまりに心が乱れてそれ以上書き続けることができなくなりました。ジョージも私が泣いていることに気づきました。「彼女は どうしてこんなに不幸に遭わなくちゃならないの。どうしてかしら。」私はジョージに言いました。「不公平だね。」

そのときふいに、家族歴史や神殿活動の真の意味が理解できたのです。目からうろこが落ちたように、私はこう悟りました。「愛する友よ。そのために私はここに来



ILLUSTRATED BY DOUG FAKKAL

たのよ。あなたの苦しみは意味のないものではない。あなたのために私にできることがあるわ。慈愛に満ちた救い主と神の宮居のおかげで、私はあなたがご主人と子供たちを取り戻せるように助けられるのよ。私の家族が永遠のように、あなたも永遠に彼らと一緒にいられるのよ。」

涙は続けてほほを伝わっていました。でもこの涙は平安と喜びの涙でした。神殿と家族と、人を助けるために与えられた機会とに対する、へりくだった感謝の涙だったのです。

スペインから戻った後は、神殿参入がさらに意義深いものになりました。あの友人のために儀式を受けたとき、私は彼女と彼女の送った生涯に対して尊敬の念を覚えました。彼女は物質的には恵まれず、死を間近に見ながら生涯を送りました。私にはそのような体験はありません。温かいお湯やシャンプー、病気の子供に与える薬などを彼女に贈ることはできませんでしたが、私にとって一番大切なもの——福音の祝福を、分かち合うことができたのです。□



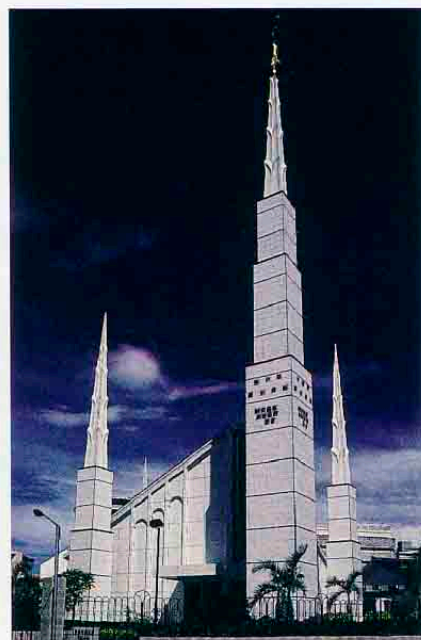


末日の神殿

世界に広がる末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿を紹介しましょう。ここに掲載する神殿をはじめ、今月号の「聖徒の道」に紹介されている神殿は、すべて聖なる場所であり、末日における主の神聖な目的のために用いられる、神の宮居なのです。

ニュージーランド神殿





左——カナダ，アルバータ神殿

上——スウェーデン，ストックホルム
神殿

下——台湾，台北神殿



上——トンガ、ヌクアロハ神殿

下——ワシントン D.C.,
ワシントン神殿

右——タヒチ島、パペーテ神殿





IGLESIA DE CRISTO REY
CALLE DE LA PAZ
GUATEMALA

IGLESIA DE CRISTO REY
CALLE DE LA PAZ
GUATEMALA

IGLESIA DE CRISTO REY
CALLE DE LA PAZ
GUATEMALA



.....
左——グアテマラシティー神殿

上——ペルー、リマ神殿

下——南アフリカ、ヨハネスブルク神殿

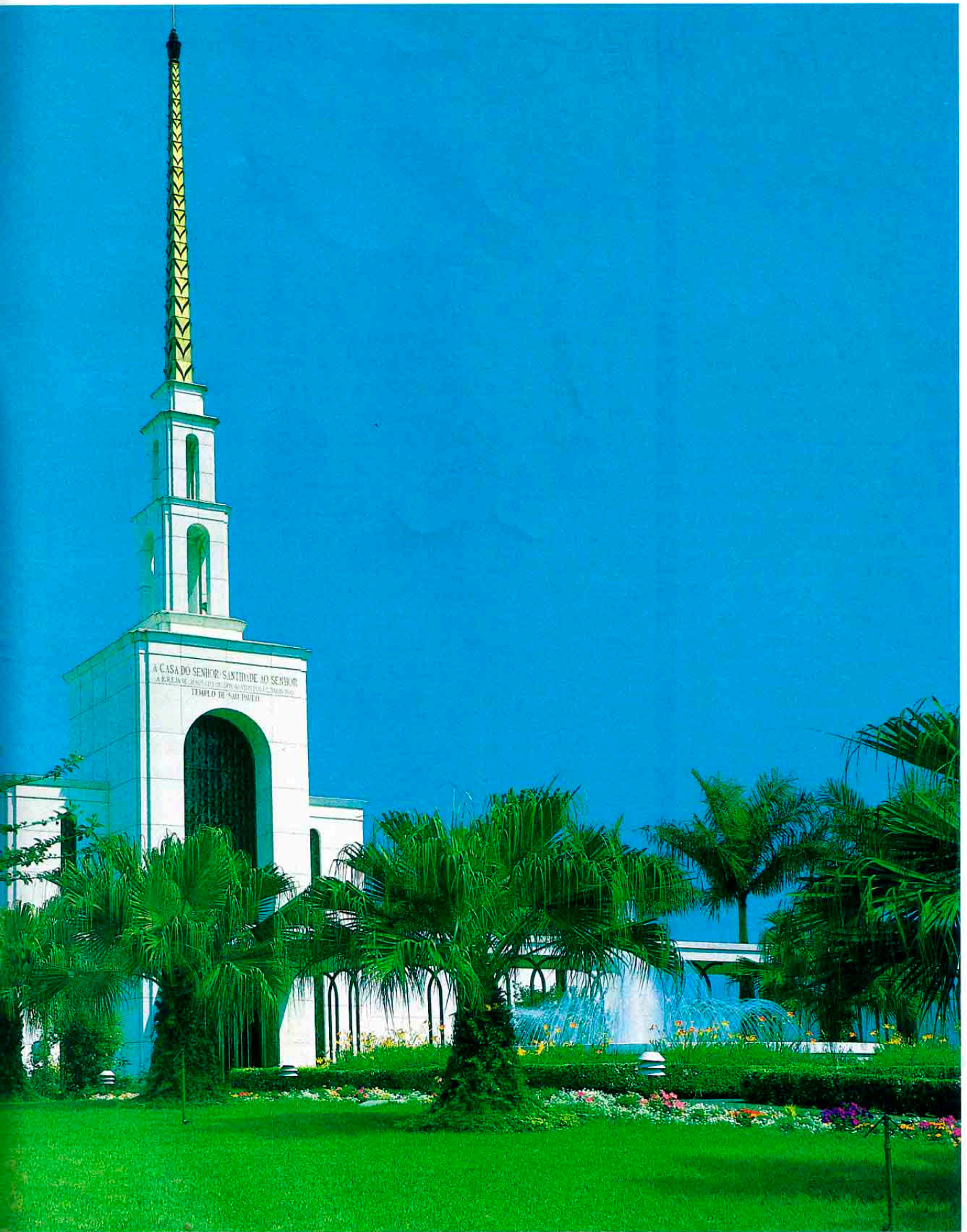


.....

上—スイス神殿

下—メキシコシティー神殿

右—ブラジル、サンパウロ神殿



ある日、神殿で

マリー・ノーエル・リグビー

私は医師の話に、ずっと耳を傾けていました。医師は、高齢者でいっばいの部屋をやさしいまなざしで見渡し、私たちにこう語りました。「もし、ベッドから起き上がる意欲を失ってしまったら、死んでしまいます。生きようと思うなら、起き上がり、栄養を取って体を清潔に保ち、運動することが必要です。」

私は80歳を過ぎていて、ベッドから起き上がりたくないうちのひとりでした。でも、その日は木曜日でした。毎週行っている神殿に、今週はまだ行っていなかったのです。夕方のニュースを見ても、いつもより悲しいニュースばかりでした。それに家庭のことで私は頭を痛めていました。体が弱っていて、家や庭の手入れはとてできそうになかったのです。自分の無力さや優柔不断さ、それに老いた体には、いやになります。しかし、ついに私はこの世と数時間お別れして、聖なる場所へ行く決心をしました。つまり神殿です。

神殿に着いてから、私はしばらくの間、腰掛けて周りの静かな雰囲気には浸っていました。左隣に座っている金髪を肩まで伸ばした若くて美しい姉妹が、ほほえみしました。右にいる姉妹は、私よりいくらかご年配のようでした。彼女もほほえみしました。私は皆友人なんだなと感じました。

そのとき、私は自分の落ち込んだ理由がわかりました。サタンがまさに実在して、地上でできるだけ多くの人々を傷つけ、誤った道に誘おうとしていたのです。私を悩まし続け、この小柄な老婆でさえ傷つけようとする恐ろしい力に驚きました。私は平安に包まれ、そばにいる見ず知らずの人たちに親近感を覚えました。

キリストの力は、サタンなど寄せつけないことがわかりました。私には自由意志があり、求めれば平安が得られることも実感しました。老齢と共に頭をもたげてくる様々な不安や心配事は取り除かれました。心の中に安らぎと確信が広がり、しなければならぬことをきちんとやり遂げる自信がわいてきました。

私は背を伸ばして座り直しました。とても幸福でした。

そばにいる友人たちもまた、部屋に満ちたみたまを感じているようでした。天父が生きておられることを、みたまが証しました。そのとき私は、この世の様々な問題は主のご計画の一環であり、私たちが善と悪、正しいことと間違ったこと、喜びと悲しみを選ぼうと大切な役割を果たすのを知りました。イエス・キリストはこの世に降誕され、今も生きておられること、主を通して私は自分の犯した過ちから贖^{あがな}われることを実感しました。そのとき、私を導き、主の計画に沿った正しい行ないをするように励ます力を感じました。

私に残されたこの世でのわずかな年月に、悩んだり、いらいらしたりして過ごすのは、なんと愚かなことでしょう。私は温かい家庭に感謝するとともに、家をきちんと整えることができるという自信が持てました。主は、私が自分の周りに小さな日の栄の輪を作るのを助けてくださると感じたのです。私の心は、希望と喜びをもって新しい人生をスタートしたいという情熱に満たされました。家を掃除し、植木の手入れをし、花を植え、隣人と親しくし、家族のだれが訪れて来ても歓迎しようという気持ちに満たされました。

子供たちは私を必要としてくれています。孫たち、ひ孫たち、そしてその家族皆が、私を必要としているのです。彼らは、私の健康と幸せを願い、私の愛と勇気を求めているのです。

神殿の儀式は終わりました。私はこの日、主がくださった贈り物に心の中で感謝を述べました。この日、神殿で受けたみたまをいつも忘れないと約束しました。外に出て、私は立ち止まり、芽を出し始めた木々や花に感謝の念を抱きました。我が家でもあんなに花を咲かせていますし、ラッパ水仙も金色の旗を振るかのように私を迎えてくれるでしょう。私の心は家庭や家族、人生、すべてのものに対する愛でいっぱいになりました。私は余生を感謝の気持ちで送り、永遠にわたる将来の良き思い出にしようと静かな決意を固めました。□





嵐を静める

マービン・K・ガードナー

外は台風が荒れ狂っていました。しかし、家の中は穏やかで平安でした。

1987年12月、フィリピンの小さな家に集まったパロンダ家族は、ひざまずいて祈りを捧げていました。いつもは静かな調子で話すルーベン・パロンダ兄弟でしたが、まるで叫ぶかのように力を込めた声で祈らないわけにはいきませんでした。妻のネリーや子供たちは、降りしきる雨と激しく吹きすさぶ風の中で、祈りの言葉が聞こえるように耳をそばだてなければなりません。この祈りには、嵐を静めてくださいと

いう、主に対する心からの願いが込められていました。

フィリピンのカマリネス・スルにあるチガオンの町は台風地帯にあって、パロンダ家族もいくつもの嵐を体験してきました。しかし今回ほど台風を静めてほしいと必死で願ったことはありません。パロンダ家族は台風のせいで、神殿で結び固めを受けるためにマニラに向かうことができないでいたのです。しかも、神殿参入を見送るのは、これで2回目のことでした。

1年前にも、すべての準備が整っていました。両親をはじめ、一緒に暮ら

している8人の子供たち全員が、必要なお金を準備するために一生懸命に働きました。(子供たちは8人のほかに結婚して独立した長男と、他界した息子がひとりいます)パロンダ兄弟と息子たちは、トウモロコシや米、ジャガイモ、メロン、バナナを栽培して売りました。パロンダ姉妹と3人の娘たちは、家族で経営しているサリ・サリ(フィリピンの小さな日用雑貨店)で働きました。また、上の息子たちは交替で家にあるジープニー(フィリピンのジープ改造の小型バス)に客を乗せて運転し、さらにお金を得ました。そし

ルーベン・パロンダ兄弟と妻のネリー姉妹は、家族を連れて神殿に行けるよう台風を静めてくださいと主に祈った。

パロンダ家族——左から、エドウィン、ランネル、ジョン・マーク、マリリン、ルーベン、アンドレス、ラーナ、パロンダ兄弟姉妹、アニー。



PHOTOGRAPHY BY AUGUSTO LM

て準備がすべて整うと、パロンダ兄弟姉妹と8人の子供たちは、神殿の推薦状を受けました。

しかしマニラに向けて出発する直前になって、ジープニーが事故に遭い、ふたりの客が重傷を負ってしまいました。自動車保険に加入していなかったため、乗客の治療費と入院費を支払うと、家族の神殿参入のための資金は底をついてしまいました。こうして神殿参入は延期になってしまったのです。

「この世ではときどきたくさんの問題に直面します」と娘のマリリンは言います。「でもどんな困難や迫害に遭っても、主のみこころに従っていれば、幸福に暮らすことができます。必ず主が助けてくださるという信仰を持てば、主にあって不可能なことはありません。」

ジープニーの事故から11カ月たって、やっとのことで資金をもう一度蓄えることができました。台風が襲ってきたのはそんな矢先のことでした。家や店は助かりましたが、作物は被害を受けました。道路には水があふれ、出発は不可能でした。

そうした混乱のさなかでも、パロンダ家族は、すぐに神殿に行くことが自分たちにとって最も優先すべきことと感じていました。「早く結び固めを受けようと焦っていました」とパロンダ兄弟は言います。あいにくあと2、3日すると、神殿は数週間にわたって閉館になるところだったのです。

結局、嵐が一番激しくなったころ、家族でひざまずき、夜を徹して祈りました。「天父は祈りにこたえられました。夜のうちに嵐は静まり、出発するにはうってつけの天気となりました。」

次の日、ジープニーを借りた(自分たちのものはまだ走れる状態ではありませんでした)パロンダ夫妻と8人の子供たちは、1台の車に全員乗り込んで15時間の旅に出発しました。一晩中車に揺られて、明日で閉館という日に神殿に到着しました。すぐに白い服に着替えて、規定の年齢に達している人(父親、母親、そして6人の子供たち)は皆エンダウメントを受けました。

それから両親は夫婦の結び固めを受け、次に子供たちが両親に結び固められました。その中には12年前、生後8カ月で亡くなった息子のアランも含まれていました。「アランは今と一緒にいないけれど、いつかまた会えるんです」とマリリンは言います。「彼は今も家族の一員なのですから。」

ネリー・パロンダ姉妹は言います。「家族全員が永遠に一緒にいられることに、本当に感謝しています。」

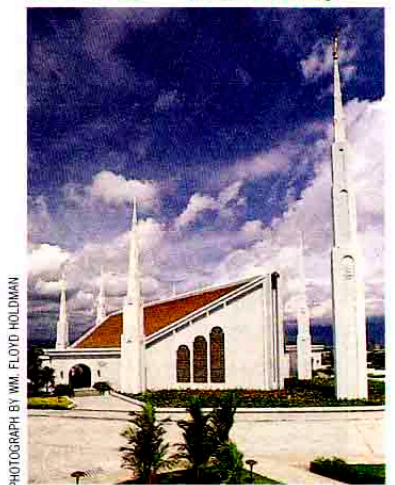
その日神殿を出たときは、もうすでに遅くなっていました。神殿に着いてから、休む暇もありませんでした。「でも、疲れや空腹は感じませんでした」とマリリンは言います。「主が祈りにこたえてくださったことが、とてもうれしかったのです。」

次の日も彼らは神殿に参入しました。

後日、一番上の息子のノエルも神殿で妻や子供たちと結び固められました。また、祖父母や曾祖父母のための儀式を受けに、再び神殿に行きました。

パロンダ兄弟は、ゴア支部でフィリピン人として最初の支部長を務めました。現在彼は、ゴア地方部でフィリピン人初の地方部長として働いています。パロンダ兄弟は当時を回想するとき、ジープニーの事故や台風の経験についてこのような見方をしています。「あれは私たちがどれだけ忠実でいられるかを証明する試練だったのです。」□

フィリピン、マニラ神殿。
前ページ上——神殿の入り口。



PHOTOGRAPH BY WAI FLOYD HOLDMAN

心を開いて若い女性を歓迎する

18歳のリサは、教会で楽しそうに話している姉妹たちから離れて立っていました。自分よりずっと年上の姉妹たちばかりで、同じ年代の人はいません。新しく加わった扶助協会は、リサにとって居心地のよい所でしょうか。少しためらっていたリサはこう考えました。「来週来ることにしよう。」しかし、みたまが行くようにと促しました。ドアに近づくと、扶助協会の会長がリサを見つけ、手を差し伸べました。「まあ、ようこそ。来てくれてうれしいわ。お待ちしてたのよ。」

世界中でこのような多くの若い女性が人生の大切な転換期を迎えています。これまで若い女性のプログラムの中で指導者としての技術を学び、奉仕してきた姉妹たちがこれからは生涯、扶助協会の姉妹たちの輪に加わり、その若い力と熱意、靈性、そして信仰に基づく決意によって奉仕するのです。

扶助協会への扉は、大きく開かれていなくてはなりません。モルモン^{モルモン}の泉に集まった弟子たちのように、私たちも「相愛し相一致してその心を結」^{あいあい}びたいと望んでいます。(モーサヤ18:21) 私たちが扶助協会へ新しく入ってくる姉妹たちの考えを尊重し、若い力を活用するならば、彼女たちは一致と愛を感じることでしょう。

扶助協会に若い姉妹たちを迎えると、彼女たちの活気や才能がどのように反映するでしょうか。どうすれば彼女たちと打ち解けられるでしょうか。



ILLUSTRATED BY LORI ANDERSON

すべての人を歓迎する

1842年に最初の扶助協会が開かれたとき、年齢や経験の違いを超えてあらゆる姉妹たちが集まりました。孫のいる人、母親、独身の女性、十代後半の若い姉妹などが互いに靈的な経験を分かち合い、共に心の込もった奉仕をしたのです。その中に19歳のバスバ・スミス姉妹がいました。60年後、彼女は中央扶助協会会長となりました。このように扶助協会は、その創設以来、あらゆる女性が交わり、また互いに学び合える場となってきました。

現代の末日聖徒であるオクラホマ州ブロークンアローのルース・モーガン姉妹は、扶助協会で過ごした日々をこのように語っています。「私は独身のころ少し内気でした。それから結婚し母親となり、いろいろな経験を積み自信が持てるようになりました。19歳のとき、大好きな祖母の隣に座って編み物を習いました。祖母と一緒に習ったのです。……私を愛しておられる天父のことや、道を示してくださった救い主のことを学びました。また、人に教

え、愛を示し、指導し、従うことも学びました。こうして『自分は天父にとっても愛されている娘である』という自信を持った、扶助協会の姉妹となったのです。」

今日、若い姉妹たちが将来に備えるのを助けるにはどうしたらよいでしょうか。

互いに励まし合う

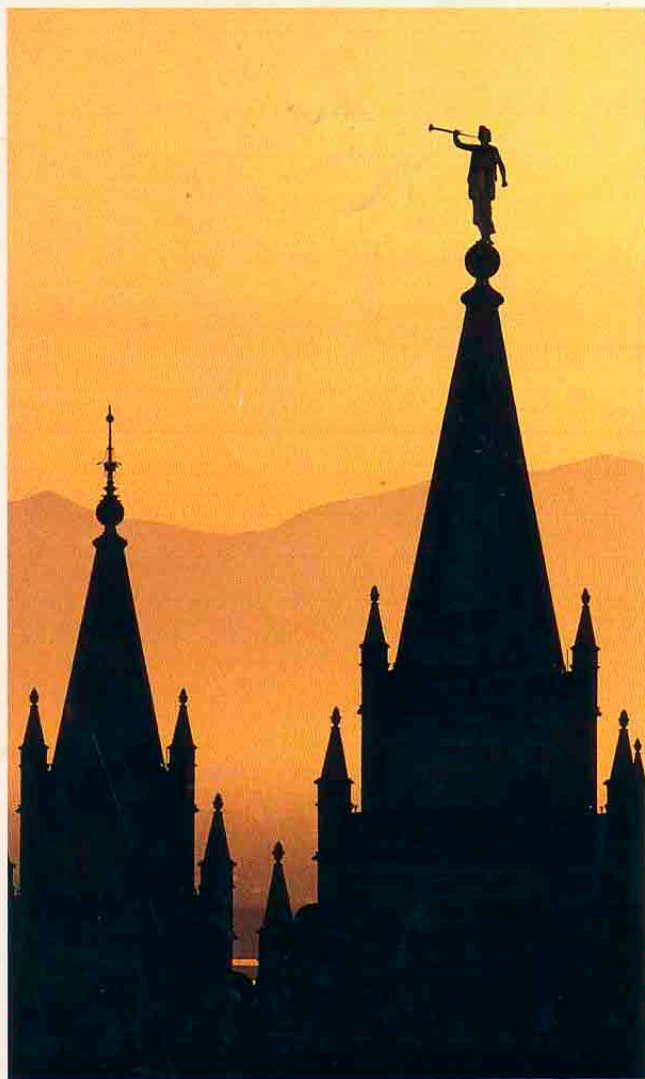
どのワード部や支部でも、若い姉妹たちは自分を愛してくれる人の模範から影響を受けます。良い模範を目にした人々は、福音に従いたいという気持ちになるのです。

年齢の違いにかかわらず姉妹たちは、互いに助け励まし合うことができます。ご存じのように、ルツとナオミは互いに思いやりを示し助け合いました。また、イエスの母マリヤは息子を出産する前にいとこのエリサベツに助言を求めました。ふたりは互いに証を述べ合いました。おそらく将来の計画を立てたことでしょう。主に対する若いマリヤの献身的な態度はあらゆる年代の姉妹たちの模範です。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます。」(ルカ1:46-47)

若い女性から扶助協会へ移行してくる姉妹たちを皆さんが歓迎し、互いに才能を伸ばし、共に活動を楽しみ、証を述べ合うようにお勧めします。

扶助協会の活動を通して若い姉妹たちを励ますにはどうしたらよいでしょうか。□





末日聖徒イエス・キリスト教会の際立った教えのひとつに、神殿とその儀式の永遠にわたる重要性が挙げられる。この特集号では、近代の神殿とその目的について様々な記事が紹介されている。

末日聖徒の道

アジア北地域会長会第一副会長

韓 仁相

人はだれもが本当の自由や平和、幸福を望んでいます。この世に真の自由と平和、幸福を願わない人は、ひとりもいないでしょう。そのような切実な願いを持ちながらこの世に生を受けた人々が、戦争や紛争のない時代を歴史に残せなかったことは皮肉なものです。

葛藤や争い、戦争はこの世のあらゆる所に存在し、だれもが自分の正当性を主張しています。事態が深刻であればあるほどそのような人々の数は増え、主張の声も一段と高くなるようです。

自由や平和、幸福を追い求めても手に入れることができないとすると、それは求める方法が間違っているか、目指すものの本質を正しく理解していないからではないでしょうか。

私たちは皆不完全な人間です。不完全なまま、神の王国の市民になることを決心した末日聖徒です。したがって、日常生活で判断に大きな過ちを犯すことはないかもしれませんが、絶対的な真理にかかわる判断を下すとすると、極めてむずかしいのではないのでしょうか。この点で私たちが犯しやすい一番深刻な過ちのひとつが、周囲の教会員と敵対することです。自分の主張にだけ固執し、意固地になって自分だけが正しいと言い張るところから間違いが生じるのだと思います。

人間はこの世に独りで暮らしているわけではありません。家族と共に暮らし、隣人や友人と一緒に生活しています。事実、すべての人は神の子です。私たちはすべての人々と共に生き、どうすれば自由や平和、幸福を実現できるか、何を主張し、何を譲歩し、どのように協力すればよいのか学ぶ必要があるの



です。伝道活動に携わり、神殿の業を行なうのもすべてそのためなのです。

ここで私たちは主が言われた、自由や平和、幸福を実現させる方法に耳を傾けなければなりません。マタイの福音書に次のような言葉があります。

「それからイエスは弟子たちに言われた、『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買ってもどすことができようか。』」(マタイ16:24-26)

キリストに従えば自由と平和、幸福は必ず得られますが、現世で生活する私たちにとってそれは決してたやすいことではありません。しかし末日聖徒

はその道を歩まなければなりません。

もし私たちがキリストの教えに従わなければ、すなわち末日聖徒の道を歩まなければ、だれもが「自分だけが正しい」という勝手な主張にとらわれ、段々むずかしい状況に陥ってしまうでしょう。

正しい道に従って歩めば、私たちの周囲には自由と平和、幸福が生まれます。そうでなければ、私たちがどれほど自分の正しさを主張しても、恐れやむなしさ、悲しみだけが周囲に残り、本当の自由と平和、幸福は妨げられるでしょう。

「パリサイ人は立って、ひとりでごう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています。』」(ルカ18:11-12)彼らは自分だけが正しいと主張しましたが、主はそれをお認めにはなりませんでした。

末日聖徒である私たちは利己心を克服し、謙遜な気持ちで、すべての人の霊的な福利のため熱心に働かねばなりません。そうするなら、今は教会に来ていない多くのお休み会員や教会員でない人々が、私たちと共に神の道、真の末日聖徒の道を歩めるようになるでしょう。

神は愛です。神は恐怖や圧制によって神の子供たちを治めたりはされません。神は生きておられます。もう6月に入り、1992年の半分が過ぎようとしています。しかしまだ新たに働ける6カ月が残っています。

神の愛と慰め、祝福が、皆さんの家庭にあるようにお祈りいたします。□

新伝道部長の紹介

6月で任期を終えるふたりの伝道部長に代わり、大管長会から新しい伝道部長が発表された。7月1日に着任の予定。

任期を終えるのは、西原里志伝道部長(日本大阪伝道部)とダグラス・松森伝道部長(日本神戸伝道部)のふたりである。

日本大阪伝道部

C・ケント・ピーターソン伝道部長(53歳)。召しを受けたときは、ユタ州サンディースターキ部マウントジョーダン第5ワード部に所属し、若い男性副会長の任にあった。また宣教師訓練センター診療所所長を務めていた。これまで長老定員会会長、高等評議員、監督、大祭司グループリーダーなどを歴任。1963年から1965年までの間、北部極東伝道部で伝道した。ユタ大学から学士号と修士号を取得。アイダホ州ポカテロで、クリフトン・G・ピーターソン、フランセス・ラドーラ・ピー

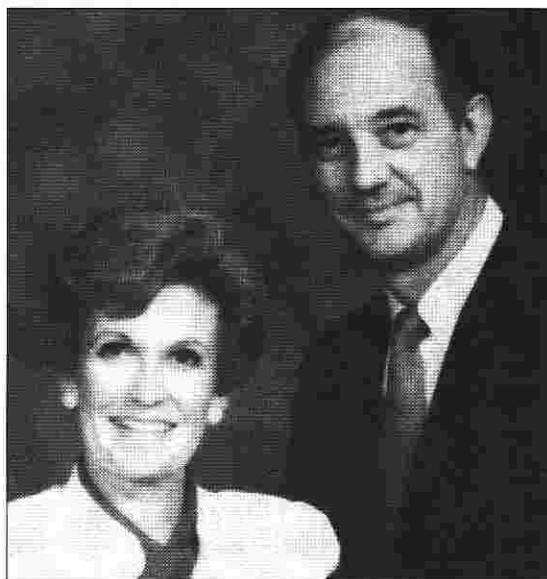
ターソン夫妻の間に生まれた。サンドラ・アーノルド姉妹と結婚し、3人の子供がいる。妻のサンドラ姉妹は、扶助協会霊的生活教師、ワード部オルガニストおよび音楽委員長の責任を果たしていた。これまでに、スターキ部およびワード部の音楽委員長、扶助協会教師、スターキ部扶助協会音楽委員長などを歴任した。またピアノの講師、各種コンサートのピアニストとして働いてきた。ユタ大学卒業後、ブリガム・ヤング大学で修士号を取得。ペンシルベニア州ヨークで、リチャード・A・アーノルド、メアリー・アーノルド夫妻の間に生まれた。

日本神戸伝道部

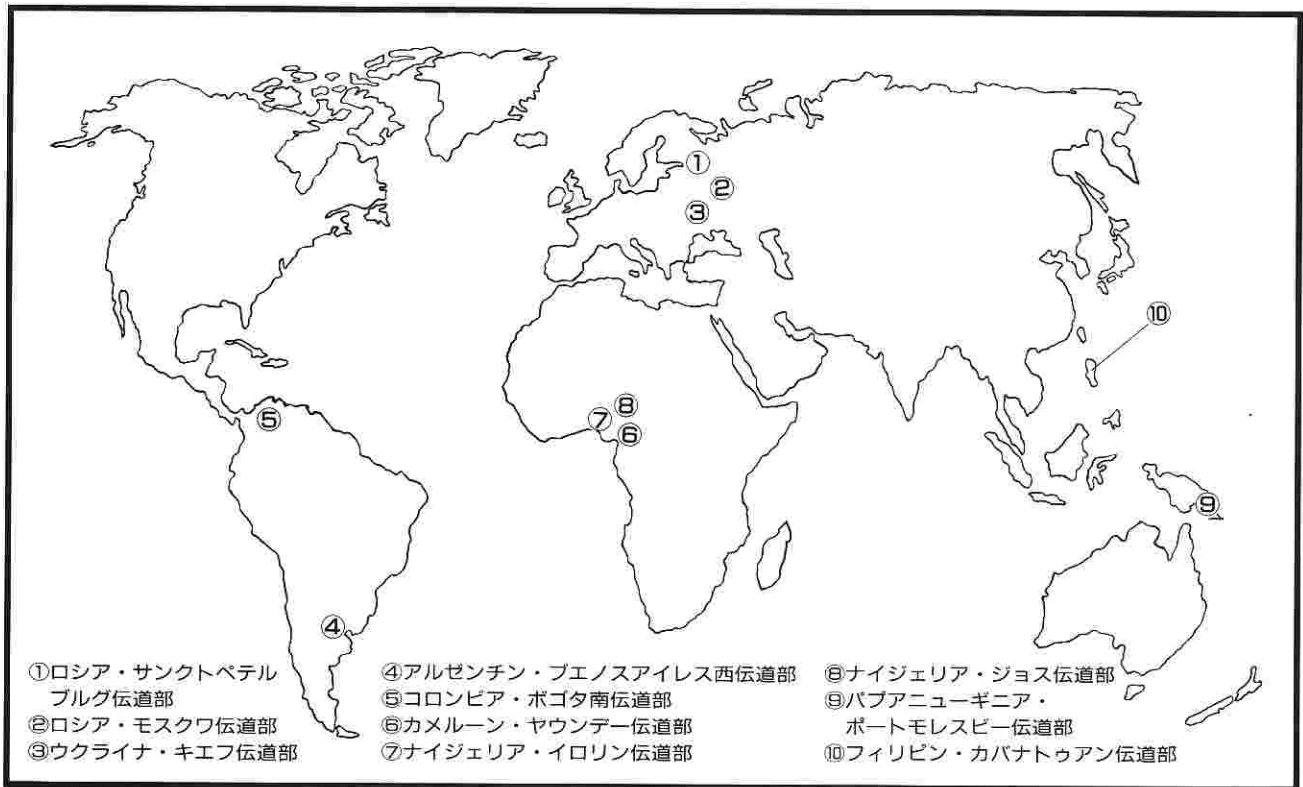
カーチス・P・ウィルソン伝道部長(50歳)。召されたときは、カリフォルニア州モーガンヒルスターキ部ギルロイ第1ワード部に所属し、大祭司グループリーダー補助の任にあった。また教会教育部指導主事およびインスティテュート講師として働いていた。これまで、スターキ部幹部書記、若い男性会長およびアドバイザー、大祭司グループリーダー、副監督、高等評議員、副スターキ部長などを歴任。1961年から1964年までの間、北部極東伝道部で伝道している。ブリガム・ヤング大学から学士号と修士号を取得。ワイオミング州ラベルで、リチャード・オーマ・ウィルソン、ジョイス・ホイットニー・ウィルソン夫妻の間に生まれた。キャスリーン・ウィリアムズ姉妹と結婚し、7人の子供がいる。妻のキャスリーン姉妹は、ワード部若い女性副会長の責任にあった。これまで、聖歌隊指揮者、ワード部音楽委員長、また初等協会では、教師、指揮者、主任教師として、扶助協会では、教師、副会長、会長などの責任を歴任。リックスカレッジとブリガム・ヤング大学で学んだ。ユタ州ソルトレークシティーで、ロス・ジェラルド・ウィリアムズ、ルアーナ・ジョンソン・ウィリアムズ夫妻の間に生まれた。



ピーターソン伝道部長ご夫妻



ウィルソン伝道部長ご夫妻



10伝道部創設される

大管長会は2月、旧ソ連、南アメリカ、アフリカ、ニューギニア、フィリピンの各地域で合計10伝道部の創設を発表した。これらの伝道部は、旧ソ連ではロシア・サンクトペテルブルグ伝道部、ロシア・モスクワ伝道部、ウクライナ・キエフ伝道部、南アメリカでは、アルゼンチン・ブエノスアイレス西伝道部、コロンビア・ボゴタ南伝道部、アフリカでは、カメルーン・ヤウンデー伝道部、ナイジェリア・イロリン伝道部、ナイジェリア・ジョス伝道部、そしてパプアニューギニア・ポートモレスビー伝道部とフィリピン・カバナトゥアン伝道部である。

アルゼンチンとコロンビアに創設さ

れたふたつの伝道部により、南アメリカの伝道部数は、50となった。50番目の伝道部が創設されたこのアルゼンチンは、くしくも南アメリカ大陸で最初に伝道部が組織された国でもある。それは1925年12月3日のことであった。南アメリカの地は、福音を宣べ伝えるため、同年12月25日に十二使徒評議員会のメルビン・J・バラード長老によって奉獻されている。

アフリカ西部に7月に開設される3伝道部のひとつ、カメルーン・ヤウンデー伝道部には、カメルーン、ガボン、赤道ギニアが含まれている。これらの国に伝道部が置かれるのは初めてである。

2月1日に創設されたフィリピン・

カバナトゥアン伝道部は、フィリピン・サンフェルナンド伝道部から分割して設立された。同伝道部には、専任宣教師が配属されていない町や村落が多くあり、大きな成長が期待されている。現在カバナトゥアンステーク部には、83人のステーク部宣教師が専任宣教師と共に働いている。彼らの努力によって、近い将来ふたつの新地方部が組織される予定である。

これらの伝道部の開設により、全世界の総伝道部数は277となった。その内訳は、北アメリカ87、メキシコ・中央アメリカ27、南アメリカ50、ヨーロッパ40、イギリス諸島8、カリブ海8、アフリカ12、アジア19、フィリピン・ミクロネシア14、南太平洋12である。(「チャーチニュース」1992年2月29日付)

エドワード・Y・岡崎元伝道部長逝去

エドワード・Y・岡崎元伝道部長(69歳)が、1992年3月20日に逝去した。岡崎兄弟はかつて伝道部長、地区代表を務めた。

妻のチエコ・N・岡崎姉妹は、現在、中央扶助協会第一副会長の責任にある。

ソルトレークワサッチステーク部ワサッチ第5ワード部に所属していた岡

崎兄弟は、1968年から1971年まで日本中央伝道部の伝道部長を務め、1972年から1975年まで日本ならびに台湾の地区代表として働いた。

また、赤十字社退役軍人病院の職員、ならびにユタ州高齢者問題委員会の初代委員長を務めた。(「チャーチニュース」1992年3月28日付)

再組織された 青森地方部長会

去る1月11日、仙台伝道部青森地方部長としてその召しを果たしてこられた小泉 隆司兄弟こいずみりゅうじが解任され、森浩典兄弟もりひろのり(写真右)が新たに地方部長に召されました。第一副地方部長には三上 敬 兄弟みかみたくし(写真左)が召され、その任に当たります。



主は人知では計り知れない 方法で導かれる

仙台伝道部青森地方部長
森 浩典

「あなたを青森地方部長に召します。」福田真伝道部長との面接の中で、第一副地方部長の責任を解任され、ほっとしたすぐ後の言葉でし

た。「私は今まで召しを断わったことはありません。神様の召しですから。でも、本当に私でいいんですか？」今思うと我ながら「いい度胸」の返事を



森浩典地方部長ご家族

してしまったと、少し後悔しています。

私が健康食品販売の仕事の関係で札幌から青森へ引っ越して来たのは、昨年4月のことです。私は生まれてから高校までは青森県で過ごしたのですが、大学のときから昨年青森へ帰って来るまでの12年間は札幌で過ごしました。教会を知ったのも札幌にいた大学3年のときでした。

当時、大学の近くにある寮形式の下宿に住んでいたのですが、以前同じ下宿に住んでいた友達がモルモン教会に入ったと聞き、「よし。ここはちょっと冷やかしのために教会の話をしよう」と、その友達を呼んで話すことになったのです。彼の話は聞いたのですが納得ができず、次は宣教師と話をすることになりました。今、考えてみると計画的に宣教師に紹介されていたような気がしないでもありませんが。

宣教師からは「7回に分けてお話しますので、それを聞き終わればすべての疑問は解決するでしょう」と言われ、とりあえず最後まで聞いてから質問をしようということになりました。すべての話が終了したとき、「バプテスマを受けたいですか？」と聞かれ、私は「いいえ。確かに良い話ではあるけれど、私は神様を信じていませんから」と断りました。それから、自分の考えや疑問に思っていることを宣教師に伝えました。そのときにひとつのことに気づきました。彼らは神様がいるという前提で話をし、一方私は神様はいないということを基に話をしていたために、それぞれの主張には接点が

ないということでした。

その後は何度となく訪問してくれる宣教師を避けるようになっていきました。しかし、いつまでも逃げていることはできませんでした。「森兄弟、もしも神様がいるという証拠が得られたら、今まで話したことがすべて本当だとわかるでしょう」と詰められ、「でも神様がいないことがわかったら、もうしつこく来ないで」と答え、そのことを祈って確かめるという約束を宣教師にしました。

実はそれまでも祈ってはいたのですが、言葉を並べているだけのもので、心から祈っていたわけではありませんでした。しかし約束をした以上とことんやるしかないと思い、ひとり薄暗い部屋でドアに鍵をかけ、祈り始めました。「神様、今まで宣教師が来ている

いろいろ話をしましたが、もしも本当にあなたがいるのであれば、バプテスマをいつ受けるべきか教えてください。そうすれば私はすべてを信じましょう。」1回目、何もありませんでした。2回目、長い間閉じていた目を開けようとしたとき、「すぐに」という言葉を聞いたような気がしました。私には本当に聞こえたと思えました。その3日後、私はバプテスマを受けました。

それからは伝道にも出、神殿結婚をすることもできました。ふたりの娘にも恵まれ、主よりたくさんの祝福をいただきました。これまで主から助けと励ましをいただき、教会に楽しく集い続けることができました。そして昨年、札幌ではぐくんできた信仰と証を持ち、年老いた私の両親の住む生まれ故郷の青森へ帰って来たのです。

おそらく主は、私を教会に導くために札幌に連れ出してくださったのではないかと謙遜に思います。もしも私が青森にとどまって両親と一緒に暮らしていたならば、おそらく宣教師との家庭集会さえも両親を盾に断っていたのではないかと思います。また、昨年教会員として家族と共に青森へ戻って来たのも主の導きによるものと感じています。

神様はたくさんの人々を一人一人に合った方法で導き、信仰を育て、強め、守ってくださっていると感じています。神様は一人一人を愛してくださっています。救いの計画は一人一人の救いのための愛の計画であると強く感じています。また、主が生きておられ、私たちを限りない愛をもって愛してくださっていることを証いたします。□

再組織された 三重地方部長会

去る3月8日、名古屋伝道部のウォルター・L・エイムズ伝道部長管理の下に開催された三重地方大会において、それまで地方部長の責任を果たしてこられた作野研一兄弟が解任され、新たに除村秀輝兄弟(写真中央)が地方部長として召されました。第一副地方部長には豆生道生兄弟(写真左)が、第二副地方部長には藤田芳夫兄弟(写真右)が召され、その任に当たります。



「われは無学にしてさげすまるる 世の弱き者たちを召し」 (教義と聖約35：13)

名古屋伝道部三重地方部地方部長
除村秀輝

今年(今年)の3月8日にエイムズ伝道部長の管理の下に開かれた三重地方大会で、地方部長の召しをいただきました。そして大会後(あんのし)任命して

いただいているとき、「今この時期に主はあなたを必要としていらっしゃいます」とエイムズ伝道部長がおっしゃいました。以来、なぜ私のように話が

下手で知識にも乏しい者が召されたのか、その目的を知りたいと主に祈る毎日です。

三重地方部には私以上に能力のある兄弟がたくさんいらっしゃいます。前任の作野研一兄弟はとても才能豊かで、お話を聞いていて得るものがいつも多くありました。ですから私のような者がこの責任をいただき、人々のつまづきにならなければいいかと思っています。

しかし私にはこの責任を果たすためにすばらしい助け手が備えられています。共に帰還宣教師のふたりの副地方部長、人生経験豊かで証の強い評議

員の兄弟たち、神殿参入回数と家族歴史に関する知識の豊かな家族歴史スペシャリストの姉妹、帰還宣教師の地方部伝道部長、幹部書記、若い男性会長。これらの兄弟姉妹をはじめとする皆さんの助けと働きに心から感謝しています。役員の方々の助けを借り、地方部の兄弟姉妹に支持されるように最善を尽くしたいと思います。

私は鈴鹿支部の支部長に召されていたときから、生活の中で3つの側面を持つ教会の使命をバランスよく行なう必要があると思っていました。私が自分の家族歴史を調べ、家族の記録を13枚提出したのが1977年10月でした。当時まだ東京神殿がなく「神殿ができるまで保管しておきます」という手紙をいただきました。それから長い間、儀式が終了したことを告げる返事はありませんでした。

手違いなどもあり、1987年4月にやっと儀式完了通知書が郵送されてきました。その当時は儀式の代理人の名前が記入されていたので、知っている方の名前もあり、懐かしく感謝しながら見ていました。そしてそのうちの1枚の名前に、その先祖の待ち望んでいた気持ちを知る思いがしました。

1945年8月15日、終戦の日に当時26歳で戦死した叔父の洗い清めの欄に、私の名前がありました。それは1981年5月20日、宣教師訓練センターにいたときに私が受けた儀式でした。たくさんの方の儀式を代理で受けましたが、その中に私の提出していた叔父の名前が入っていたのです。また母からはいつも、私が叔父に似ているので叔父の生まれ変わりだと冗談交じりに聞いていました。そのような叔父が私に語りかけているように感じました。

また私たち家族には、この世に生まれることなく霊界に行った次女のマリアがいます。神殿に参入して日の光栄の部屋でお祈りをしていると、いつも強いみたまを感じます。心の中に温かいものを感じて、マリアが霊界で一生懸命働いているという証を強くすることができます。

毎月第1日曜日に家族でお墓参りに行くとき、子供たち一人一人がお祈りを通してマリアに語りかけています。



除村秀輝地方部長ご家族

そのようなとき、家族として必ず昇栄し、マリアと共に住むことができるようにと願わずにはいられません。私は父親として、神権者として、どんなことがあっても家族を日の光栄に導かなければならないという重い責任を強く感じます。

確かに神殿活動は現世と来世をつなぐ扉だと思います。ですから私たち自身が救われるためにもこの活動をおろそかにしてはならないと思います。神殿は私たちが主と近くなり、また主の救いの計画を理解することができる場です。

1974年12月にこの教会の門をくぐり、きょうまで本当に多くの兄弟姉妹の助けにより自分の信仰を築いてくることができました。当時高校生だった私を一神権者として励まし、指導してくださいました支部の方々から感謝しています。

また伝道中にいろいろプレゼントや励ましの手紙をくださった兄弟姉妹に、また神戸伝道部の地でお世話になった兄弟姉妹に心から感謝しています。

伝道を終えて半年後の1983年4月29日に妻と東京神殿で結婚しました。当時、二部の大学に行くために名古屋に

小さなアパートを借りました。仕事にも就いたばかりで収入も少なく、もちろん車もなく、教会に行くときは妻がバスで、私はその後ろから50ccのバイクでついて行く日々でした。そして無事4年で卒業し、今は郷里に自分の家も持ち、4人の子供と家族6人で毎日楽しく生活しています。

このような生活ができるのも周りのたくさんの人々や両親の助け、またいつも妻の励ましがあるからです。家庭の中に子供たちの清い祈りがあり、また妻の主に対する忠実さと私を支持してくれる気持ちがありますので、本当に家庭に平安があり一致があると思います。家族一人一人に感謝しています。私は不完全で愚かなところがたくさんあり、毎日が悔い改めの連続ですが、地方部の方々のために少しでもお役に立つことができればと思います。

私は確かに神様は生きておられ、日々私たちにたくさんの祝福をくださっていますことを知っています。モルモン経には神様のみ言葉が書かれてあり、日々学ぶことにより神様に近づき、たくさん導きを受けられることを証します。この教会は主の唯一まことの教会です。□

「君たちはあの200人の大歓声が聞こえないか」

北九州ワード部家族歴史活動



昨年7月28日に行なわれた記入会で、家族の記録の作成に励む北九州ワード部の会員たち

あがな 先祖の贖いのために

福岡ステーク部
北九州ワード部
土田善樹



1991年12月29日、私たちは赤飯を片手に喜びに満たされていた。それは、私たちの先祖が救いの儀式を受けられるように立てた1991年のワード部の目標、1,500枚を上回る1,680枚の家族の記録を提出することができたからだ。

11月上旬、あと残すところ1か月余りとなっていた。しかし、目標を達成するにはまだ600枚は書かなければならない。神権役員、家族歴史相談員との話し合いで「ちょっとむずかしい」「1,300枚くらいにしようか」などと、消極的な意見も出たが、最終的には「やはり、1,500枚でいこう」ということで一致した。北九州ワード部が家族歴史に始まって家族歴史に終わった1

年間の取り組み方法を紹介したい。

初めに相談員は1年を通して、毎週のように各家庭を訪れた。1度訪問すると2時間、3時間と指導した。この輪が広がり、何人かがある家庭に集まって記入会が行なわれるようになった。

各家庭での記入が軌道に乗り始めると、年4回のワード部家族の記録記入会が計画され、毎回、目的と目標を持って行なわれた。

●第1回記入会 5月26日。「無制限100枚勝負」出席者30人。15:15-20:00。とにかく100枚書きあげるまで、という目標を掲げて時間無制限で始めたが、延々4時間45分にも及んだ。

●第2回記入会 7月28日。「7.28.シオンの教会に霊が全員集合」出席者29人。15:00-17:00。

7月21日、^{せいさく}聖餐会のテーマを「家族歴史」として会員の意識を促し、7月28日までを家族歴史強調週間として、月曜日-家庭の夕べ、火曜日-神権役員会、水曜日-ホームティーチング、木曜日-インスティテュート、金曜日-独身成人の活動、土曜日-有志の会のすべての集会で家族歴史を作成した。7月28日には家族の記録の作成をする人、また記録に名前を記入される

先祖の霊が喜びをもってその場に集合することを望んで、記入会が午後3時から5時まで行なわれた。

●第3回記入会 9月22日。「君たちはあの200人の大歓声が聞こえないか」出席者22人。14:45-18:40。先祖一人一人の贖いに思いを込めて、200人がバプテスマを受けられるよう、相当量の記録の作成が行なわれた。

●第4回記入会 12月15日。「1,500枚を目指して」出席者32人。15:30-18:00。目標達成まで残り581枚。しかし、この日は達成できず、12月29日に望みを託すことになった。

●特別集会 12月29日。「1,500枚達成して赤飯を食べよう」出席者15人。15:30-17:30。最終的に1,680枚の家族の記録が作成された。

教会の使命の3つの側面のひとつを果たして「死者を贖う」べく、1年間信仰を持って家族の記録の作成を続けた結果、多くの会員が頻繁に神殿に参入し、自分の先祖のために儀式を受けた。1992年も1,500枚の記録作成と身代わりの儀式執行の双方の達成に向けて、再び熱くなっている。(つちだ・よしき 第一副監督)

チャレンジにこたえて

福岡ステーキ部
北九州ワード部
近藤美香



伝道中にただひとつ心から証することができないことがありました。それは、家族歴史についてです。書きかけのまま、1枚も提出せずに、伝道に出ました。そのため家族歴史についてはほかの人の経験談を話しました。

伝道地より帰還し、若い女性の責任をいただいて、指導者会に参加するたびに「1枚でも多く家族の記録を提出して、神殿に行くように若い女性に勧めてください」という指導者の言葉を聞き、若い女性にチャレンジする以上、私も頑張るに共に証を分かち合いたいと思いました。そこで腰の重い私も、やっと家族歴史の作業に取りかかりました。幸いワード部も家族歴史に力を注いでいたので、家族歴史相談員の姉妹と共に1年の目標枚数を決めました。目標を決めたとき、どのくらいの除籍謄本が入手できるか心配でした。謄本を送ってもらえるよう役所に手紙を出すたびに祈りました。そして祝福により謄本もかなりの傍系まで手に入れることができました。また謄本が予想以上に送られてくると、今度はお金の方が心配でしたが、祈りが聞き届けられて、臨時収入があり、それを充てることができました。また家族の記録を記入する時間にも恵まれました。

昨年1年間家族の記録を書きながら、なぜ主はこのように私たちに望まれるのかと疑問に思いました。役所の資料や家族の記録の記載事項に誤りがある可能性もあるし、アダム時代から誕生してきた人の数を考えると、儀式を受けられる死者は、ほんの一握りです。それなら復活のときに行なった方がよいのではないだろうか。そんなことを考えながら家族の記録を書い

ていると、先祖への愛と感謝の思いがわき起こりました。また主は、人ができるところまでを行ない、その中で主を頼り、覚えていくことを望まれていると少しずつ理解しました。

主は本当に不思議なことをされるお方です。ワード部の人々の助けによって、毎日少しずつ書いて、目標枚数を達成することができました。

主は確かに生きておられ、死んだ人々と生きている私たちのためにみ業を進めてくださっていることを証します。そして、み業の中で奉仕する機会が与えられていることに心から感謝しています。(こんどう・みか ステーキ部若い女性書記)

1度の旅行で得たもの

福岡ステーキ部
北九州ワード部
岩本幸子



昨年11月末の東京神殿訪問を機に、私は長年の懸案事項をようやく実行に移すことにしました。実母と継母双方の先祖の地である宮城県を訪れたのです。10年くらい前に、直系の先祖の謄本はすでに手に入れていました。けれども、傍系のは果たして除籍謄本が入手できるかどうか不安で、そのままになっていました。

「行ってもだめかもしれない。」こう思いながら出かけたのですが、すでに持っていた直系の謄本を示しながら、その中のこの人とこの人と言って請求したところ、すんなり発行してもらえました。旅行姿の私を見て、「このためにわざわざ来られたのですか」とか、「ご苦勞様です」という言葉さえかけてくださいました。役所を3カ所回り、合計20枚の謄本を手に戻ることができました。

その後、それに倍する追加請求に対しても謄本が発行してもらえ、それら

を基に今まで146枚の家族の記録を提出しました。これでもまだ約半分の謄本は手つかずの状態です。たった1度の旅行によって得た祝福の大きさに驚いています。私たちが思い切って門をたたくとき、その扉が大きく開かれることを証します。(いわもと・ゆきこ ワード部初等協会会長)

あきらめていた 家族の記録の作成

福岡ステーキ部
北九州ワード部
河野奈津子



私は教会に入って約10年になりますが、今回ワード部で家族歴史に取り組むまでは、たった2枚の記録を提出していたにすぎません。それというのも、家族歴史を調べ始めたとき、役所からは「火事で焼けてありません」「人権擁護のため送れません」などの返答ばかりで、かろうじて送られてきた謄本も、逃亡や離婚など複雑で、怠惰な私はもうだめだと半分あきらめていたからです。しかし、家族歴史相談員の姉妹は何とか謄本が取れるように私を励まし、助けてくれました。最初の目標は10枚から始めました。彼女は何度も訪問してとても丁寧に読みにくい昔の字を教えてくれたり、複雑な続柄などを説明してくれたりして、楽しく家族の記録が作成できるように助けてくれました。そして今までに66枚提出することができ、今は100枚を目標としています。家族歴史相談員だけでなく、神様と先祖の助けを受けていることを感じます。そして先祖の身代わりの儀式を受ける喜びを感じることができ、感謝しています。(こうの・なつこ ワード部若い女性第一副会長)

温かい助けの手

台湾・東台北ステークキ部第3ワード部

覃 敦子

母 板倉鎮は今年90歳になります。3年前に千葉市の特別養護老人ホームに入ってから、本当に多くの兄弟姉妹の温かいお心遣いに支えられて、引き続き福音の中で生活させていただいております。

母は奈良ワード部のすばらしい兄弟姉妹の導きにより1979年、77歳の高齢でバプテスマを受けました。さらに同年最後のハワイ神殿参入団に参加させていただき、当時ブリガム・ヤング大学ハワイ校で勉強していた私の長男も一緒に参入して、亡父との夫婦の結び固めを受ける幸せを得ました。母よりも21年前にバプテスマを受けた私がまだ果たせないうちの死者の救いの儀式を母は見事にやり遂げたのです。その知らせを受けたときには夢かと驚くやらうれしいやらで、天のお父様に感謝を捧げるほかなすすべを知りませんでした。

その後も奈良県生駒市でひとり暮らしをしていた母を奈良ワード部の方々は心から温かくお世話してくださいました。ときには年寄りの身勝手からいろいろご迷惑をおかけいたしましたこ

とと申し訳なく存じております。84歳まではカナダやアメリカ、台湾、東南アジアなどを元気に旅行したりしていましたが、ひとり暮らしは無理になり、熊本県人吉市の私の妹宅で共に暮らすことになりました。温泉はあるし、妹の夫は親孝行な心温かい人なので、上げ膳据え膳で趣味の水墨画でも描きながら、楽しい余生が送れると自他共に喜んだのもつかのま、私より4つ年下で、とても元気だった妹が思いも寄らない癌の宣告を受け、弟夫婦が母の世話をするようになりました。ところが弟夫婦も共稼ぎだったため、やむを得ず老人ホームに入ることになり、母にとっては、娘の重病と環境の大変化というふたつの大きな試練に直面したわけです。

義弟の献身的な看護と最善の治療により、妹も一度は全快と言われて喜んでおりましたが、退院後2カ月もたたないうちに再発してしまいました。治療は大変むずかしくなり、あらゆる手を尽くしたにもかかわらず、妹はついに家族に見守られながら息を引き取り

ました。人吉での葬儀を済ませた私は、千葉にいる母に会ってからすぐに台北へ帰らなければなりません。大事に持って行った妹の遺髪と遺影、形見の品などを手渡すと、言葉なくむせび泣く年老いた母に「パラダイスにいるのよ」と繰り返して言うしかありません。元気になるまで一緒に神殿に参入しましょうね、と後ろ髪を引かれる思いで母と別れました。

以来、千葉ワード部の神権者や扶助協会の姉妹の方々が毎月訪問してください、また遠く大津からも前ステークキ部長が様子を見に来てくださるなど多くの方々の温かいお心遣いに母共々感激し、力を得て過ごしてまいりました。

その後、妹の1周忌が済んでから、神殿で働いているある兄弟の特別なご指導と千葉ワード部神権会の方々のご協力により、一昨年12月1日、亡父の誕生日を機に、折よく大津から神殿参入されていた縁故の深いご夫婦の立ち会いのもとに、念願の、私と亡き妹との結び固め、母と3人の叔母と祖父母との結び固めとを滞りなく行なうことができました。これらの儀式が執り行なわれるに至るまで、すべてが本当に不思議なほどスムーズに運ばれ、すばらしい祝福をいただきましたことを心より感謝しております。儀式の後、母が疲れすぎないかと心配していたのですが、帰日も千葉ワード部の兄弟たちが手配して下さった車でゆったり横になることができましたし、永遠のきずなによる霊的な喜びからか、かえって神殿参入以前よりも元気になったほどです。

いろいろな状況を考えた末、母はやはり引き続き老人ホームで暮らしておりますが、私自身も66歳となり、高齢化社会での生き方についても、福音の原則に従って学んでおります。お世話になった兄弟姉妹にお礼を申しあげても、召された責任上、当たり前のことをしてだけです、とおっしゃるのみです。この世の試練の中にあつて、心から感謝を捧げるとともに、永遠の進歩を目指して、与えられた責任を皆様の模範に従って、成し遂げていきたいと思っております。(ちん・あつこ ワード部初等協会第一副会長)



覃敦子姉妹(後列右から2番目)と母親の板倉鎮姉妹(前列)

家族の証

永遠に一緒なんです

横浜ステーキ部
小杉支部
能美圭子



私は去年11月の証会の日に心の中で「証をしなさい」というささやきを感じました。

私は、前に出てお話しするのが恥ずかしいからと考えていたけど、みたまが言うなら神様が助けてくださると思っ
て、お母さんに「心の中が温かくなって神様が『証をしなさい』』と言って
いるような気がする。だからママもつ
いて来て」と言ったら、お母さんが
「いいよ」と言って、ついて来てくれ
ました。そして、私が証をした後、つ
いて来てくれたお母さんが証をして
いることを聞いて、私は、友達にお母
さんの本当の子供じゃないことをから
かわれるんじゃないかと、私はどうし
てお母さんから生まれなかったんだろ
う、などと考えていたら、とても悲し
くなってしまいました。お母さんが戻
って来ると、お母さんのひざで聖餐会
が終わるまで泣いてしまいました。

聖餐会が終わった後、お母さんとふ
たりで別の部屋に行ってお話をしまし
た。

私が泣いた理由をお母さんに言うと、
お母さんは「圭ちゃんがママから生ま
れなかったのが悲しいように、ママも
圭ちゃんが産めなかったことが悲しい
のよ」と言いました。

そして、お母さんは、「血のつなが

りよりも霊のつながりの方が大切な
んだよ」と教えてくれました。そして、
「血がつながっていても、心が通じ合
わないと本当の親子とは言えないんだ
よ」とも言っていました。それで私は
納得しました。その後お母さんが「圭
ちゃん、結び固めをする？」と私に聞
きました。私は「圭子、前からしたい
って言ってたじゃない」と言ったら、
お母さんが「ごめんね、大きくなって
後悔することがあるかもしれないと思
ったから……、だけど本当にママでい
いの？」と言ったから、私は「ママが
いいんだもん」と言ったらお母さんが
泣いてしまいました。私は「ママ泣い
ちゃだめ」と言ったら、お母さんは
「だって、すごくうれしいんだもん」
とっていました。

本当に私もうれしかったです。

その2日後に、学校の帰り道、心が
温かくなって「早く結び固めをしなさい
』』と言われた気がしました。そのこ
とお母さんに言ったら、お父さんと
相談して11月20日に結び固めをする
ことにしました。

そして、11月20日に東京神殿で「親
子の結び固め」をすることができまし
た。大好きなお母さんやお父さんと結
び固めができてとてもうれしかったで
す。そして、12月7日、私たちの家に、
生まれたばかりの男の赤ちゃんが来ま
した。赤ちゃんの名前は「勇樹」です。
今度は勇樹君と4人で結び固めをでき
る日を楽しみにしています。

神様が、家族が永遠に一緒にいられ
よう結び固めの儀式を与えてくださ
って、とても感謝しています。(のう
み・けいこ 勇者クラス)

今、主のみこころが わかりました

横浜ステーキ部
小杉支部
能美玲子



3年前、結婚して11年たつという
のに、私たち夫婦には子供がい
ませんでした。それは子供が好きで、
「この世で子育てほど尊い仕事はない」
と信じていた私にとっては、大きな試
練でした。

それまで私たちは評判のよい病院を
何件も巡って治療を受けていましたが、
どの病院に行ってもこれといった大き
な原因が見つからず、お医者さんは首
をひねるばかりでした。数え切れない
ほどの回数の検査を繰り返し、治療
を受けても一向に効果はなく、その苦
痛は計り知れないものがありました。毎
日祈っても祈っても答えは与えられず、
何度も落ち込みました。子供に恵まれ
ている人をうらやんだり、主に対して
「なぜ自分には……」と恨み言を言っ
たり、「私は祝福を受けるには値しな
いのだろうか。女性として生まれなが
ら子供を産めないなんて、自分には価
値がないのではないだろうか」と自信
を失ったりして、言葉では語り尽くせ
ない苦い気持ちを味わってきました。

中でも最もつらかったのは、自分と
しては精一杯の努力をしているにもか
かわらず、神様のみこころがわからな
いことでした。子供が産まれるように
もっと努力すべきだろうか。それとも

あきらめて別の道を取るべきなのだろうか。祈っても答えはわからず、ただただ焦るばかりでした。

そのような状態のとき、「圭子」が我が家に来て来ました。圭子は主人の兄の子で、2歳半で事情により両親が離婚、4歳のとき父親が再婚したものの継母との折り合いが悪く、2年後、精神的にぎりぎりの状態まで追い詰められて我が家に飛び込んで来ました。幼い子供には背負うものが大きすぎたのでしょう。とてもおびえた様子で、一日中私にしがみついていた。私は圭子を抱いて神様の話をしたり、祈りの仕方を教えて共に祈ったりしていました。そのような日が何カ月も続き、やがて圭子は日一日と本来の明るさとやさしさを取り戻していきました。

圭子は、そのころよく神様の夢を見たと話しました。神様は圭子の心を慰め、教える必要を感じられたのでしょう。そのような神様の愛と、それを受ける純粋な幼な子の信仰を、圭子を通して知りました。

しばらくすると、圭子は自分から私たちに「ママとパパになってほしい」と言うようになり、義兄も「圭子が望むなら……」と泣く泣く手放すことにしました。

1年前圭子を正式に養女として迎え

ましたが、それでもやはり、子供を産むための努力は続ける必要があると思います、これが最後と決意して教会員の産婦人科の先生を訪ねました。先生や看護婦をしている友人の姉妹から特別な配慮と最良の助けをいただき、現在において最高の治療を受けました。しかし結局、赤ちゃんには恵まれませんでしたが、けれども私は絶望的な気持ちよりはむしろ、安らぎを覚えていました。「立派な神権者である先生に診ていただき、最高の治療を受けても駄目なのなら、神様のみこころはきっと別のところにあるに違いない」と悟ったからです。

そこで私たちは生活を整えて、以前から考えていたとおり、もうひとり養子を迎えるための手続きを取りました。それまでの情報から、1年くらいは待たなければいけないと覚悟していましたが、不思議なことに1カ月余りで生まれたばかりのかわいい男の子を授かりました。そこには神様の特別な助けがあったと強く感じ、昨年12月2日生まれたその子を「勇樹」と名づけました。

勇樹は私たち夫婦と圭子に大きな喜びと慰めをもたらしてくれました。圭子も今ではクラスでも一番活発で、先生やクラスメートからも信頼され、3

年前のおどおどした姿はまるでそのようです。そして私たち夫婦にとって、愛し、誇る大切な娘であり、信仰の良き友であり、また私たちの助け手として大きな存在となっています。

私は17歳のころ、血液の病気のために危うく一命を取り留めるという経験をしたことがあります。そのときはまだ、この福音は知りませんでした。神様に命を再び与えられた思いがし、与えられた命を大切に何かひとつでも神様に喜ばれ、世の中の役に立つことをしたいと願いました。その後教会に入って家庭の大切さをそれまでもまして強く感じた私は、結婚して自分の子供を育てたら、家庭に恵まれない子供を引き取って育てたいという気持ちになっていきました。

結局、結婚しても自分の子供には恵まれず14年間無駄な時間を費やしたように思いましたが、昨秋、圭子と結び固めについて真剣に話したときに、初めて、この経験は無駄ではなかったと気づきました。圭子が「ママから生まれなかったことが悲しい」と言ったとき、私もためらいなく「ママも圭ちゃんを産めなかったことが同じように悲しいよ」と話していたからです。この約2週間後、恵まれて神殿で親子として結び固められました。

親に恵まれなかった子供たちの気持ちを理解し、自分の子供として育てるために、私には長い間子供に恵まれない経験が必要でした。これまで、14年という長くつらい道のりを歩んできましたが、今、そこに主の計り知れない深い思いと愛があったことがわかります。主のみこころを悟ることができ、また時間を経て、神様との約束を実行できることを深く感謝しています。同時に、神様が特別な環境にある尊い子供たちを育てるという仕事を、私のような者に与えてくださったことに心から感謝しています。(のうみ・れいこ 支部扶助協会教育担当副会長)

能美ご家族



世界で一斉に行なわれた 扶助協会150年祭記念集会

1992年3月14日土曜日、ユタ州ソルトレークシティのタバナクルから世界に向けて、扶助協会150年祭記念集会の衛星放送が行なわれた。日本など、衛星による同時放送が行なわれなかった地域では、同日の衛星放送を基にビデオカセットが作成され、翌15日、数時間遅れでビデオによる記念集会が持たれた。世界中で一斉に集会を開くことを可能にしたこの歴史的な放送は、世界中の姉妹たちが聴衆として、また参加者としてひとつに結ばれるために行なわれたものである。



扶助協会150年祭 記念集会に寄せて

高崎ステーキ部
前橋ワード部
須田みどり



風 や光が和らいできた早春の夕方、3つのワード部の姉妹たちが高崎ワード部の教会堂に集い、衛星放送を通して記念集会を見ることができました。150周年記念を世界中の姉妹たちとお祝いできる特権と祝福に心から感謝の気持ちを表わしたいと思います。中央扶助協会会長会の姉妹の方々、モンソン副管長、そして世界中の姉妹たちの霊感あふれるお話を心熱くしながら聞いていました。世界各地に住む見ず知らずの姉妹たちのために祈り、愛し、信頼し、励ましてくださる方々

に深い感動を覚えました。「自分自身と生活を変えなくてはならない。主に心向け人々に仕えたい」という望みがわいてきました。

私は扶助協会をとっても大切にしてきました。ときには人生の様々な問題に直面し落胆したり悩んだりしますが、扶助協会から愛と慰め、知恵と喜び、あらゆる良いものを得てきました。扶助協会は姉妹の「霊の泉」なのです。それはあくまでも清く深く終わりが無いからです。

150年前の3月17日、予言者の店の2階で3人の神権者と20人の姉妹だけで組織された扶助協会。そのとき150年先の私たちのことを想像できたでしょうか。心のタイムマシンに乗って初期の姉妹たちから現代に至るまで、そして未来の扶助協会を見たい気がします。どんなことを考え、どんなふう暮らしてきたのかとても興味深いことです。扶助協会のビジョンは過去から未来へ、姉妹たちの心をひとつに結びつけてくれるに違いありません。

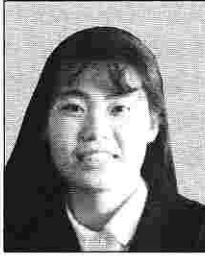
150年祭の中心である奉仕活動にすべての姉妹たちが参加し、証と喜びが得られるように祈ります。ジャック姉

妹の語られた最も険しい山、すなわち家庭こそ福音が実践される場です。ここで成功したなら隣人に奉仕することは、たやすいことではないでしょうか。家族に対する愛があればきっと奉仕ができます。私はできます。だれにでもできます。扶助協会は神が組織されたのです。世界にこれほど素晴らしい組織があるでしょうか。その一員であることを誇りに思います。

「主の御前にへりくだり、その聖い御名を呼び、自分に堪えられない誘惑に逢わないようたえず目を覚まして祈り、これによって聖霊の導きを得、謙遜、柔和、従順であって忍耐強く勘忍と愛情とに富み、主を信じ、永遠の生命を受ける望みを抱き、終りの日にあげられて神の安息に入ることができるよう、常に神の愛を心に忘れない」(アルマ13:28-29)ならば私たちは豊かな人生を送ることができると信じています。衛星放送によって世界の姉妹たちの力強い信仰を目にすることができたことを感謝します。すべての姉妹たちが扶助協会の祝福を得られるようにお祈りします。(すだ・みどり 高崎ステーキ部扶助協会ホームメイキング担当副会長)

母の模範

高崎ステーキ部
高崎ワード部
関雅美



小さいころ、扶助協会とは大人の姉妹たちの集まりで、むずかしいことを学ぶところだと思っていましたが、実際参加してみると、扶助協会は、天父の娘として、若い女性で学んだことを実践する場であり、愛に満ちあふれているところであると知りました。

私の母は、4人の子供の母親で、祖父母を気遣い、社会的な仕事も持つという、実に忙しい人です。

朝5時ごろ起きて洗濯を始め、朝食の支度をして学校へ行く子供を送り出し、会社へ出かけます。会社から帰って来ると、家を掃除し、夕食の支度をして、夜は小さい子供の宿題を見たり、

教会の責任の準備をしたりして、ようやく疲れた体を床に横たえるということの繰り返しです。いつか過労で倒れてしまうのではないかと思われるほどです。でも母は、文句ひとつ言わずにそれらのことをこなします。

そんな忙しい中でも、子供たちに福音を教え、家事の手を抜かず、毎日強く働いています。何よりも大切なのは、どんなに疲れていても笑顔を絶やさないことです。母親は家庭の太陽であるということを、母は実践することによって証明してくれています。また、私たち子供が、主の道から外れそうになるとき、愛をもって正しい道を示してくれます。

私は考えました。家事をはじめ、社会的責任、教会の責任で東奔西走し、子育てで一喜一憂し、自分のことは少しもできないのに、他人のために喜んで尽くす。私だったら、きっと、心身共に疲れ果て、現実から逃避してしまうでしょう。

でも、いつか私も結婚し子供を産み育てるときになったら、母のように家庭の太陽として一生懸命生きたいと思います。そのために、毎週日曜日に扶

助協会で学び、活動に参加して技術を向上させていこうと思います。またそのような機会が十分に与えられていることに心から感謝しています。

扶助協会が創立されて150年。その間、様々なことが起こりました。1842年といえばアヘン戦争が勃発した年です。その約20年後にはアメリカ南北戦争が起こり、世界恐慌、第一次、第二次世界大戦、中東戦争、現在では、ドイツ統一、東西冷戦の終結など様々です。そのような時代にあって、扶助協会の姉妹たちは恐怖に脅かされる世界の中、愛はいつまでも絶えることがないというモットーを信じ、前進してきました。児童虐待、放任などが問題になる中、必死で家庭を守っています。そして、私も今、そのようなすばらしい姉妹たちと共に学んでいるのです。

世界中の扶助協会の姉妹たちと共に、主の道を歩めることに感謝しています。また良い模範を示してくれる母に感謝しています。母の模範を基として、愛はいつまでも絶えることがない、このモットーを実践していこうと思います。(せき・まさみ ワード部オルガニスト)

大阪地区大会開かれる

主の「愛にあふれたやさしさ」を 強調された教会幹部



写真左——サム・K・島袋長老
右——ニール・A・
マックスウェル長老

去る2月1、2の両日、十二使徒定員会会員のニール・A・マックスウェル長老管理の下に、大阪地区大会が大阪北ステーキ部センターで開催されました。

1日に行なわれた神権指導者会には、

大阪、名古屋の両地区のステーキ部、地方部の神権指導者498人が集いました。マックスウェル長老はその集会で「日本の教会は、『窓が開いている』状態にあり、以前になかったような進歩の可能性があると話されました。

2日は気温が低かったものの晴天に恵まれ、大阪地区にある4ステーキ部、3地方部に属する会員たち約2,700人が午前と午後の2部に分かれて集まりました。会場に向かう電車は途中の乗り換え駅に着くたびに乗り込んでくる懐かしい兄弟姉妹、宣教師のあいさつや近況を伝え合う話の輪がそこかしこにできて、「走る同窓会場」になったようでした。

この会で、ふたりの教会幹部はまさにキリストの証人として、やさしく、愛情を込めて話されました。司会を務めたアジア北地域会長第二副会長のサム・K・島袋長老はこれまでの信仰生活の中で学んだ4つの大切なこと、すなわち、(1) 天父とイエス・キリストに対する証を大切にすること、(2) 天父とイエス・キリストを固く信じる(まこと)こと、(3) 戒めに従い、日々祈りを捧げること、(4) 親切、愛、赦しの心をもって隣人に接することを挙げられました。特に、「私たちが心と思い、精

神をひとつにするならサタンは無力になる」という言葉は印象的でした。

マックスウェル長老はお話の冒頭で、「日本は今後、末日聖徒イエス・キリスト教会の発展に従って繁栄する」と予言し、アジア地域における日本の重要性についても言及されました。さらに、宇宙の創造主イエス・キリストが、メシヤとして肉体を受けこの世に来られたとき、人々は御子を「大工の子」(マタイ13:55)と呼び、どのようなお方を知らなかったように、私たちの多くもイエスがどのようなことをされたのかを知らないと言及し、主の称号として「愛にあふれたやさしさ(love-kindness)の神」を私たちに提示

されました。主に近づくとは、私たち自身が主の性質を身につけていくことであり、そうすると、隣人に対してもっとやさしくなれると教えられました。

また、「イエス・キリストの贖いの業とは、地球上に存在した700億人の全人類に対するイエス・キリストの愛にあふれたやさしさを実現させたものである。主はその業をたったひとりで、永遠の贖いに対する永遠の犠牲として、自らをすべての者の下に置いてゲツセマネの経験を経て、十字架におかかりになった。退くこともできたにもかかわらず、栄光を天父に帰して、おひとりで酒槽を踏まれた。これは人類の歴史上最大の出来事であり、私たちにと

って最も大切なことである」と論じ、最後は十二使徒としての祝福と証を日本語でされました。会場にいた人は皆、長老の心からの愛とその源となっている証がまさにその「中心にまで浸みわたり心が燃え」たのではないのでしょうか。(IIIニーフай11:3)会場は閉会後も温かいものに包まれているようでした。

2日にわたったこの大会は、マックスウェル長老の「愛にあふれたやさしさ」という言葉を会員一人一人が実践するならば、個人も教会も輝かしい成長を遂げると予感できるものでした。(レポーター：原田明 神戸ステーク部高等評議員)

JMTC

ローカル

4月に召された 専任宣教師 第154期生30人



皆さんの原稿を募集しています

▶ローカルページでは皆さんの原稿を募集しています。改宗談や日々の生活で得た証(仕事にかかわる証など)、本誌を読まれての感想文などをお送りください。

▶現在ローカルページでは証の著者の生年を記載しておりませんが、編集作業の参考のため、投稿の際には連絡先(電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名に併せて生年を記入し、写真を同封のうえお送りください。

▶お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

▶あて先：〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室
電話03(5489)9251
ファクシミリ03(5489)9254

後列左から1-11, 中列左から12-20, 前列左から21-30

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 鶴野守人	神戸S/姫路W	東京南伝道部
2. 櫻井城二	名古屋S/名東北W	仙台伝道部
3. 橋本利紀	名古屋西S/岐阜W	大阪伝道部
4. 横尾政明	大阪北S/岡町W	仙台伝道部
5. 小原一浩	名古屋S/刈谷W	大阪伝道部
6. 松井和弘	横浜S/大船W	沖縄伝道部
7. 吉田真二	大阪S/枚方W	神戸伝道部
8. 川口正太	大阪北S/京都洛北W	東京北伝道部
9. 佐々木昭司	松山D/今治B	沖縄伝道部
10. 鈴木正三	町田S/町田第1W	神戸伝道部
11. 鈴木政子	町田S/町田第1W	神戸伝道部
12. 森下由美	仙台S/米沢B	東京南伝道部
13. 松本弘子	岡山S/米子W	東京南伝道部
14. 山岸始美	東京西S/国立W	札幌伝道部
15. 牧野由紀子	岡山S/岡山西W	仙台伝道部
16. 岡香子	大阪北S/花屋敷W	東京北伝道部
17. 北野雅子	広島S/徳山W	東京北伝道部
18. 原佳子	町田S/厚木W	福岡伝道部
19. 鶴見典子	東京北S/浦和W	沖縄伝道部
20. 山本琴枝	札幌S/札幌東W	名古屋伝道部
21. 高木宏彰	大阪堺S/泉南B	神戸伝道部
22. 渡辺一博	長野D/長野B	神戸伝道部
23. 中西道崇	仙台S/福島W	札幌伝道部
24. 水野祐司	神戸S/神戸W	沖縄伝道部
25. 佐藤祐二	仙台S/長町W	神戸伝道部
26. 狩野元滋	仙台S/青葉W	東京南伝道部
27. 落合弘光	東京S/所沢W	福岡伝道部
28. 吉川博	北陸D/金沢B	東京南伝道部
29. 吉田範之	釧路D/釧路B	福岡伝道部
30. 河田智成	福岡S/福岡W	東京北伝道部

S:ステーク部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

役員の内命

1992年3月18日から4月17日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の内命(敬称略)

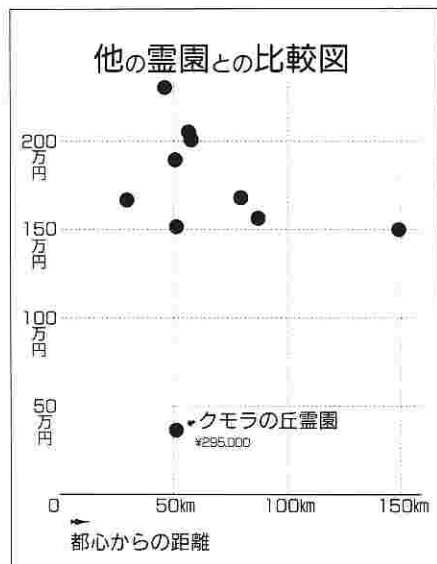
- 仙台伝道部青森地方部八戸湊支部
新支部長: 小野更
(前任者: 一戸克己)
- 東京東ステーク部千葉ワード部
新監督: 谷亀浩
(前任者: 大石幸治)
- 大阪堺ステーク部和歌山ワード部
新監督: 藪谷彰
(前任者: 山本謙彰)
- 名古屋伝道部三重地方部鈴鹿支部
新支部長: 真光繁幸
(前任者: 除村秀輝)
- 名古屋伝道部三重地方部松阪支部
新支部長: 作野研一
(前任者: Southwick, David Brandon)
- 岡山伝道部高松地方部徳島支部
新支部長: 杉本宣重
(前任者: 福田光剛)
- 岡山伝道部松山地方部八幡浜支部
新支部長: 松本淳三
(前任者: 宮崎昇三)

新ユニット

- 大阪堺ステーク部岩出支部
支部長: 井上勝
(3月15日, 和歌山ワード部から分割)

1992年度「クモラの丘霊園」分譲のお知らせ

所在地：埼玉県入間郡
毛呂山町長瀬1313



「クモラの丘霊園」分譲の今年度募集の締め切りは、1992年12月31日です。永代使用料は毎年値上がりいたします。分譲希望者は、早目にお申し込みください。

- 墓地永代使用料 1区画295,000円
支払い方法 一括または分割払い。分割払いの場合は、初回金5,900円、以降毎月4,900円59回払いの無利子分割払いとなります。
- 墓地管理料 年間3,000円(初回金とともに1年分を前納し、以降毎年定められた期日までに支払うものとします)
- 申し込み方法 以下の書類をクモラの丘霊園事務局に提出してください。
(1)クモラの丘霊園使用申し込み書
(2)住民票
(3)クモラの丘霊園永代使用契約書 2通
(4)銀行自動振替手続き書類
- 今年度申し込み期限 1992年12月31日
- 墓所の指定 申し込み書類受領確認の後、順番に行ないます*
- 初回金および管理料の振込先 三和銀行青山支店 普通預金口座219499
クモラの丘霊園 代表 岡本 亮
- お問い合わせ先 〒106東京都港区南麻布5-10-30
末日聖徒イエス・キリスト教会内
クモラの丘霊園事務局 電話03(3440)2351(代)

*注1991年12月31日までに、1,600墓所中、500墓所が分譲済み。

ブックセンターからのお知らせ

1. 新輸入品の紹介

「モルモンタバナクル合唱団賛美歌CD」(英語版)

カタログ番号50003

59分 全17曲 1,600円

「モルモンタバナクル合唱団賛美歌カセットテープ」(英語版)

カタログ番号52003

59分 全17曲 1,200円

作詞者であるブルース・R・マッコンキー長老自らの歌詞朗読が入った『救い主、われ信ず』(72番)をはじめ、『全能の父なる神よ』(40番)、『わが主よ、わが神』(44番)など、よく知られた賛美歌をモルモンタバナクル合唱団が歌っています。CD、カセットテープいずれも同じ内容です。

2. ビデオカセットの価格改定

既刊のビデオカセットの販売価格が以下のように改定になりました。

品名	カタログ番号	収録時間	現行価格	改定価格
ビデオカセット①	53478 300	120分	¥2,500	¥1,800
ビデオカセット②	53479 300	120分	¥2,500	¥1,800
ビデオカセット③	53480 300	90分	¥2,500	¥1,800
ビデオカセット④	53481 300	110分	¥2,500	¥1,800
新たな決意をもって教える	53007 300	37分	¥1,500	¥1,200
初等協会指導者訓練	53008 300	49分	¥2,000	¥1,200
アロン神権定員会を活気づける	53011 300	49分	¥1,500	¥1,200
天父の計画	53031 300	29分	¥1,500	¥1,200
ステーキ部宣教師訓練プログラム	53032 300	95分	¥2,500	¥1,500
わたしたちのプライマリー	53179 300	57分	¥1,500	¥1,200
助けを必要としている人に手を差し伸べる	53257 300	30分	¥1,500	¥1,200
教会の使命を果たす	53408 300	90分	¥2,000	¥1,500
福祉の原則を実践する	53507 300	17分	¥1,500	¥800

4月に召された 専任宣教師 第154期生30人

